

新米C級冒険者は最善を尽くす

我らに幸あらんことを

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新米C級冒険者グレゴリー・グレゴリオはこの世界が作りものだと知っている。

しかし、だから何だというのだろうか。驚くなかれ、世界はすでに救われようとしていた。

ならば、少しでも、世界が救われる過程で生み出される犠牲を減らそう。

彼はそう考えた。

ちよつと真面目で、常に金欠で、なぜか二つ名が『害虫』である主人公が頑張って最善を尽くそうと奮闘する。

金なし、チートなし、いくじなし！それでも行くのだ、グレゴリー。

目次

新米C級冒険者としての初任務	1
新米C級冒険者、炎系後輩魔術師を押し付けられる	10
炎系後輩魔術師との模擬戦	19
新米C級冒険者と二つ目の任務	27
炎・風・氷魔術師ども、ドラゴンを狩る	35
先輩C級冒険者『生存』	43
新米C級冒険者と三つ目の依頼	51
冒険者一行とガウント村	58
C級と獣人と睡眠ポジション	65
詭弁使いと愚図ども	72
ガウント村とミネシスウルフの決着	80
白き巨人と冒険者の資質	88
冒険者が強くなるには	95
後輩目隠し盾使いの見舞い	102
生存と狼娘とエンゲージ制度	110
師弟制度をかけて、群像	118

新米C級冒険者としての初任務

場面は街道である。お世辞にも整備されているとは言えない、馬車がガタゴトなる田舎道である。

馬車には従者が一人、中身にひとがいるかわからないが、その周りには六名の護衛がいる。

Dランク冒険者が五名、Cランクが一名であり、その一名が最近昇進したばかりのグレゴリー・グレゴリオである。

年は若く、幼顔といった風情である。身長も平均かそれよりも下で、冒険者全体でみると小柄の部類に入るだろう。もちろん、人間の冒険者の中で、である。

しかし、グレゴリーには子供特有の甘えという雰囲気がなく、むしろ苦勞をよく知っている管理職といった顔つきであった。

「おい、グレゴリー。お前C級に上がったんだってな」

グレゴリーの隣、禿げた頭に悪人面。恵まれた体格に担がれた大剣は、それだけでグレゴリーの身長を超えてしまいそうだ。彼の名をハントという。

「お前、冒険者になって何年目だっけか」

「僕は四年半ですね」

「おお！ともなりやワンチャンA級もあるな。その調子で頑張れよ」

冒険者になってから五年以内にC級へ行ける奴は、生涯をかければA級になれる。

根拠なんて一つもないただのジンクスではあるが、一定の指標になっているのも事実である。

冒険者の大半はDランクで終わる。その中でC級に上がれるのは才能がある証拠であり、それもまだ若いグレゴリーがなしたのだから、その分の期待というのも大きくなる。

もつとも、グレゴリー自身はC級が自身の限界だと思っているらしく、

「とはいってもですね、ハントさん。B級からは本当に人間の域を超えていると言いますか……」

「グダグダ言っただけよ。まだ若いんだから自分の限界を決めつけるのはまだ早えだろ」

「ハントは晩年D級だからな！」
「うるせえ」

仲間のヤジに、ハントはゆでだこのように顔を真っ赤にし、鼻息を鳴らした。

「C級からは昇進試験に学力テストが追加されやがる。だから武器を振り回すしか脳がない俺たちはD級どまりだ。だが、お前は利口だからな」

「まあ、ハントさんよりは賢いですかね」

だっはっはっ、と仲間たちの笑いとともに、グレゴリーは馬車に目を向けた。

何が入っているのだろう。

これはただの好奇心からなるものではない。グレゴリーたちは現在馬車の護衛を依頼されている。よって、中身によって最悪の場面はどう対処する関わってくる。

荷物だったら、即逃げて、違約金を払う。なんてことも可能だ。

しかし、従者、馬の動きやスピードによってあまり重くないという想定はつく。

人間だろうか。馬車の外見はかなり古臭く、壊れはしないだろうがお偉いさんを運ぶに足らない貧しいなとも思う。

その時、中から声がした。

「もし、」

「……はい」

声は少女のものであった。窓にかけられた布から顔を出すと、やはり、想定と同じぐらいの年齢であった。グレゴリーより少し幼い十五から十六といったぐらいか。

変わった点はその見た目である。うす緑の肌、とがった耳、そして馬車と釣り合いな高価な身なり。

「お嬢様。あまり下賤な方とお話するのはお控えください」

奥にいた執事らしい人物の制止を、しかし聞くことはなかった。

「いいえ。今回の目的は世情に通じるためのものですわ。このような方々と話してこそではなくて?」

下賤と言われ青筋を立てるハント。冒険者は血の気が多く、たまに依頼主と喧嘩をして罰則を与えられることもよくある。

そうなつてはたまらない、グレゴリーは慌てて会話の主導権を取りに行く。

「ええと、名前も知らぬお嬢様?何か質問がございますか」

「ええ。さきほどあなたはCランクに上がりたてと申しておりますたわよね。それが事実なら、この度の冒険者ギルドは大きな過失を行ったといえるわ」

一種挑発じみた発言にますます、気を荒くする冒険者たち。一方で、ばかにされた本人は涼しげな表情で、冷静に返答する。

「とうとう?」

「ギルドは『この度の依頼にぴったりな人材を設けます』とおっしゃったのよ。にもかかわらず、唯一のC級が上がりたて?馬鹿にしないでくださいますか」

「そういうてめーは何者なんだよ!」

耐え切れずに、ハントが怒鳴った。もちろんグレゴリーを除いた冒険者の代弁であった。冒険者の多くは反骨精神にあふれている。彼らもまたその例外ではなかったのだ。

無礼者に手を出そうとする執事風の付添人を制し、少女は高らかに名乗った。

「わたくしは、セレビア・L・リーファイア。ご存知なくつて?」

ご存知ないわけがなかったのだ。いくら無学な冒険者と言えど今から向かう国の姫君の名前は当然把握している。ましてや筆記試験を乗り越えたグレゴリーはなおさらだ。

それだけではない。

(セレビアだって!?)

グレゴリーにはこの世ならざる知識があった。この世界を仮想と見立てて、人物全てに役割があると思ひ込む異端の発想。いやゆるメタビジョンである。そして

(セレビアと言ったらヒロインの一人じゃないか。まさかこんなところで会うなんて)

彼女のことをよく知っていた。

「さて、あなたたちはどう弁解されるおつもりかしら」

セレビアの追撃にとうとうしびれを切らしたハントを片手で抑えたグレゴリーは、驚愕しつつも現状を冷静に分析していた。

「……言ってた通り、少し傲慢で視野が狭い」

「はい？」

「いえ、それでこの度の依頼はですね、ギルドとしても正当な手配でございますよ」

「正しいですよ？」

彼女の質問に答えるため、グレゴリーはすつと息を吸った。

ハントやそのほかの冒険者は怒りを抑え、この隊の責任者に行く先をゆだねるらしかった。

「今回の依頼は隠密であることに大きな意味合いがあります」

隠密、という言葉にセレビアは眉を少し動かす。このことは、グレゴリー側には一切説明をしていないにもかかわらず、今回の依頼は隠密であることを見抜いたことにある。

また、返答の速さもよかつた。本人は自分に知らされていない情報を冷静に分析し、いわれのない上層部の過失を否定すべく、依頼主に説明する。

なるほど、確かに頭の回転はCランクにふさわしいかもしれない。

だが、一国のお姫様をDランク、Cランクだけで護衛するのは、力不足と言つていいだろう。

B、もしくはAランクであつてもおかしくない。

しかし、

「A級、B級が護衛をするということは、それだけ大切なものを抱えていると教えているようなものです。情報に詳しい人なら、それだけで誰を護衛しているのかたやすく理解するでしょう。それに、盗賊たちは独自のブラックリストを作っています。周囲のA〜C級冒険者はすべて顔が割れている」

「それはもちろん、存じています。しかし、結局Cランクであるあなたが護衛しています。同じCランクなら手練れの方がよくなって？」

「たしかに、僕はC級の中でも弱い方です。新米ですから」

「……ああ、そういうこと。つまり、あなたは新米であるからこそ盗賊のブラックリストに載っていない、と」

「ええ」

つまりはこうだ。Cランクは一線を越えた存在だ。否が応でも活躍は広まり知らない人はいなくなる。グレゴリーもまた、盗賊たちのブラックリストに載るのは時間の問題だろう。

だが、今は載っていない。なぜならCランクに上がったばかりだから。盗賊たちにとって今の護衛はただのDランク集団だ。

よって、隠密の依頼である以上、ギルド側が出せる最高戦力はグレゴリー一人であつたわけである。

「ご理解いただけましたか？」

「ええ。でも一つだけ。もし、それでも盗賊に狙われたらどうするのです？ 私狙いではないとしても、普通に商人を狩る盗賊に出会ったら。ほぼDランクの方では護衛できないのでは？」

「それは——」

「おいつ、グレゴリー！」

護衛集団の一番先頭が大きな声でグレゴリーを呼んだ。

切迫した様子が声でわかる。周囲の人間も当然グレゴリーも非常事態に備え身構えた。

「どうしました」

「先頭に人影多数！おそらく盗賊だ」

「なっ!？」

セレビアの従者が驚く。当然、もしセレビアを狙った盗賊であれば、隠密は全くの裏目であり、また一国の姫を暗殺することを考えると、その強さも現戦力では対応不可能であろう。

グレゴリーは落ち着いて先ほどの冒険者に続きを促す。

「規模と推定の強さは？」

「五十人前後……だな。装備は貧弱。おそらく一般人と大差ないだろ

う」

とはいえ、数が数である。現在グレゴリーの戦力は自身を含め六人。約九倍の人数差である。

従者はすっかり青ざめ、セレビアさえも眉をひそめている。

「わたくしも手伝いしましょうか」

「いえ、結構です」

グレゴリーは、セレビア側とは正反対の好戦的な表情を浮かべている。

おそらくこれは、王族として生まれ、強者として育ったセレビアには一生理解できないことであろう。

しかし、一般の冒険者はたいてい生まれが貧相であり、弱者として生きてきたものが多い。

だからこそ、力を誇示することが何よりも好きでたまらないのだ。それがいかに、血にまみれた力であろうと。

「総員、待機」

グレゴリーの言葉遣いが一気に変わる。

戦闘を今か今かと待っているメンバーは、不服そうだが従っている。

「なんで待機なんだ。さっさと突撃すればいいだろ」

「ハントのいう通りだぜ。何か懸念が？」

「いいえ、ただ——早い者勝ちが冒険者の鉄則でしょう？」

瞬間、周りの木々が騒ぎ始める。木の葉が舞い、土ぼこりが巻き上がる。

何かが、何かが自然の法則を捻じ曲げているのだ。

セレビアの目には、グレゴリーからあふれ出す魔力がはっきりと見えていた。

いや、セレビアでなくともその事態は理解できた。

透明であるはずの風が、グレゴリーの鉈に巻き付いてゆく。

『切り裂けー！』

グレゴリーが自身の得物をふるうと、ゴウツの音とともに、斬撃となった風が盗賊を襲った。

「いつてえええええ!!」

「ギャアア!」

「お、俺のうでがあ……」

まさに死屍累々、彼の一太刀は瞬く間に盗賊を半数に減らしてしまつた。

セレビアたちは驚愕を、冒険者は各々不満を垂らした。

「ふざけんな!俺の取り分が!」

「半数はやりすぎだ」

「すみません、つい……。あとは皆さんに任せます。冒険者は――」

「早い者勝ち!!」

冒険者たちは早々に駆け出し、盗賊めがけて暴力という名の力を誇示し始めた。仕事が終わるのに十分もかからないだろう。

「すごい、あれだけの魔術を低級詠唱で!あなた魔術師だったの?」

「はしくれですけどね。僕の使える魔術はたったの二つです。それに、まじゅつばいたい魔術媒体も持っていません」

魔術媒体とは、魔術師が魔術師たらしめる必需品である。その形、あり方、性質は人それぞれだが「魔術師の人となりは魔術媒体を見ればわかる」と言わしめるほどのものであり、もはや魔術師の半身と言つてもよいほどだ。それには大きな理由がある。

「魔術媒体は、使用者の魔術の効率化、威力の上昇など様々な効果があります。それもなしにあれだけの威力を!たしかに魔力の効率は良くありませんでしたが……。なぜ魔術媒体をお持ちにならないのです?」

セレビアは珍しく、人間をほめ、興味を持った。エルフとして魔術の話には弱いといつても、彼女の人となりを知っていれば、それがいかに異常なことか。知る人が知れば驚愕するだろう。

そして、当然の質問。魔術媒体は基本持つだけ得である。もちろん、媒体の合う合わないというのも存在するが、だとしても持たないという選択はない。

ただ、このお嬢様にも知らないことがあるらしい。

「高」

「……え」

「魔術媒体、高い」

魔術媒体はとても高い。質はピンキリであると言え、一番安くて市民の一年分の平均年収ぐらいある。魔術師として歩むのに必要なのは、まず魔術媒体を手に入れる機会があるかどうかなのだ。

「つな！高いとは言ってもあなたCランクでしよう？」

「C級になったのはつい最近です」

「だ・と・し・て・も！Dランクでも半年ぐらい節約すれば……もう！」
セレビアがぷりぷりと怒り出した。童女のようにほほを膨らませる姿は実にかわいらしい。

それに、彼女の推察は当たっていた。実際、D級になると魔術媒体は買えなくもないものであり、さらに言えばワーカーホリック気味のグレゴリーは、三か月も節約を続ければ魔術媒体を買うことができた。

ただし、彼に浪費癖がなければの話だが。

彼がたつたの一週間も新しいおもちゃを我慢することができないわけがない。

「と、会話をしてるうちにハントさん達が帰ってきましたね」

「露骨に話を変えるわね……。しかし」

セレビアは帰ってきた冒険者たちの様子をじつと眺めた。

なるほど、グレゴリーが盗賊を半数減らしたとしても二十五人余り。彼ら五人では大体五対一だ。

しかし、彼らの服には返り血一つすらない。

つまり、返り血の心配ができるほど余裕があった、ということだ。

「どうです。D級も案外やるでしょう」

「案外は余計だ、くそグレゴリー。C級になったからって俺たちの強さを忘れんな」

「もちろんですよハントさん。だって、冒険者の平均はD級。つまり、ギルドの主力ですよ？弱いわけがない」

平均、D級。一見「弱そう」といった字ずらでも、実態は戦闘集団の主力である。日々骨身を削り、敵と相対し、どうすれば殺せるか、ど

うすれば生き残れるかを真剣に考える仕事について、一人前の太鼓判を押された人たち。

その武術は、その魔術は、当然一般人の比ではない。

ただ、それ以上が人間離れしているだけで。

「いかがです、セレビア様」

「そうね……、訂正します。この旅路は安泰です」

それだけ言ってそっぽを向いてしまった。

グレゴリーは肩をすくめ、他の人は腹の虫がおさまらないらしく、盗賊の身ぐるみをはぎに行った。

ただ、『この旅路は安泰である』。この一言だけは皆の総意であった。

こうして、新米C級冒険者グレゴリー・グレゴリオの初任務は終わった。

新米C級冒険者、炎系後輩魔術師を押し付けられる

冒険者ギルドは騒がしいところだ。騒がしくない時がほとんどない。

朝まで飲んでる同業者、昼は同じパーティーメンバーだろうか、今回の反省点、次回の依頼の話などをしてている。夜になればまたバカ騒ぎ。

仕事の受付と食堂が一緒になっている方が悪い。という意見もあるが、どう考えてもまともなモラルのない冒険者が悪いのである。もつとも、モラルがないからこそすぐ他人のせいにするのだが。

そこに一人、ぽつねんと座って待っている黒髪の青年がいた。

彼の名前はグレゴリー。魔術師にして戦士。前衛にして後衛というあべこべなスタイルでC級まで上り詰めた天才である。二つ名は『害虫』。

四人は座れるだろう机に一人だけ、というのは少し哀れに見えるが、とうの本人はあまり気にしていないようだ。

というか、今、彼は何も考えていない。ただ、自分の手の中にある木の枝を見つめるだけである。

ときおり、

「うえへっへえ」

と気持ち悪い声が聞こえてくるだけである。

なぜ彼はこんな悲しい生き物になってしまったのだろうか。

時は少しさかのぼる。

冒険者一団が無事お姫様を国にお連れできた時。

エルフは基本かなり排他的である。他国のものを町に入れることはない。

しかし、今回のように致し方ない場合もあり、そのような時は、よそ者専門屋敷に連れていかれる。

よって、セレビアとグレゴリー一団が最後に顔を合わせるのは、国の玄関ともいえるような場所であった。

セレビアの国——クルイアは国土のほとんどが森林である。もちろんだだの森林ではない。中央に生えているこの世界で最も大きい植物、名を世界樹。それを囲むように、ここ以外では見かけることのない多種多様な植物が生えている。

もつとも、そのほとんどに輸出制限がかけられているが。

故に、セレビアがグレゴリーに渡したものは、通常のエルフにはありえないことであった。

「あなたにこれを差し上げますわ」

「……えつと」

渡されたのは30cmほどの木の枝である。

さながらRPGの初期装備かと思えるほど何の変哲もない枝に見える。

とりあえず、グレゴリーは渡された得体のしれないものをじっと見ながら、セレビアに返答した。

「ありがとうございます？」

「あら。あまり驚きになられないのですね。てっきり泣いて喜ぶと思っただのに」

くすくすと笑うセレビアだが、グレゴリーには本当に心当たりがなかった。いったい、たかが木の枝ごときに自分が泣いて喜ぶだろうか。お姫様は平民のことを見下しすぎである。

いつのまにやら、グレゴリーの周りには冒険者たちが集まり、木の枝を勝手に奪ってはじろじろと眺めていた。

「なんだあ、こりゃあ」

「見りゃわかんだろハント。木の枝さ」

「俺がガキの頃こんな枝拾ってよく遊んだな」

「しかし、お姫さん。異性に渡すプレゼントが木の枝とか……」

「エルフの感性って独特ね」

各々が好き勝手に言うのを、セレビアはむっとして言い返した。

「でしたら返してもらってよろしいのよ。せっかく魔術触媒を差し上げようと思っただのに」

「ちよつとハントさん返してください。僕がもらったものですよ」

「まあまあ、ちょっと待って。もう少し見てからだな」

「そう言っただけにしまわないでください」

全員が手のひらを返し、木の枝にべたべた触ろうとするのを横目にセレビアはあきれたように説明を加えた。

『リクヨの樹の杖』。私たちの国にしか自生してない魔力伝導率のいい大樹の枝よ。全体として癖が少なく、そこまで大きな効果もないから、魔術師見習いなどがよく使っているわ。とはいえ立派な魔術媒体。大事になさい」

まるでできの悪い生徒と接するような態度である。腕まで組んでいる姿は師匠のようで、グレゴリーのいやな記憶を刺激する。

実際、魔術師はよく弟子に魔術媒体を送る。そういう習わしがあるのだ。

「魔術媒体もなしにあれほどの魔法が使えるなら、今後にますます期待といったところね。精進しなさいな」

そう言っただけ、笑った。

彼女のためにも頑張らなければなるまい。グレゴリーは精一杯の返事と感謝の念を伝えた。

こうして回想を終える。

つまり、今グレゴリーの手元にあるのは魔術媒体「リクヨの樹の杖」である。

彼は常々ほしいと思っただけながらも、何の役にも立たないだろうがらくたたちにお金をささげ続け、ついぞC級にあがってしまった。

しかしよもや、こんな機会があるとは。これからはうんと利口になって、無駄遣いを減らそう。

まず、この杖を収めるスティックホルダーでも買おう。なるべくかっこいい奴がいい。

こうやって妄想を広げ、ひとりだにやにやする奇人が完成した。周囲が一切気にしていないのは、冒険者自体に奇人が多いおかげ

か、それともグレゴリーは常にこんな感じだからなのか。

「おや、グレゴリーくんではないですか。いつクリイアから帰ってき

たんです。それに——魔術媒体ですか。昇給祝いに購入されたんですか」

奇人に臆することなく話しかけたのは、ジエツト・アイスマン。水色の髪にやせこけたほほ、今年35歳になるらしいが見た目はそれ以上におっさんっぽい。D級冒険者でまさに中堅といったところだ。

「昨日ですね。それに、魔術師は一目で魔術媒体とわかるんですね。購入と言いますか——まあそこらへんはどうでもいいでしょう。『リクヨの樹の杖』なんですが、ジエツトさんから見てどう思います」
「ちよつと持ってみても?……ああ、やつぱり癖が少なくて素直ですね。私も初めの媒体はこれでしたよ。今は違いますけど」

そういつて胸元の、透き通る水色の宝石がついているペンダントを揺らした。

ジエツトは珍しい氷魔術の使い手で、それゆえ魔術媒体は他の人とは違ったものを使っている。

グレゴリーは頭の辞書をめくり、あたりをつける。

「えつと、『氷結石』ですか」

「よく存じてますね。そうです」

氷結石は魔術媒体として使われることはほとんどない。魔力をよく通しはするが、氷魔術師しか使えず、また氷魔術を使える人間はかなり少ない。

しかし、貴族の家には必ずあるという魔道具クーラーボックスを作る際には大量に使うため、供給自体はある。

「私の場合は、素材の値段よりも魔術媒体にする加工代の方が高かったぐらいでね。それで結構高くついてしまったんだ」

「そうなんですか。でも、一生ものですからね。ジエツトさんはこれ以上魔術媒体を買うことはないでしょう?」

「それが——それでもないんだ」

ジエツトは深く息を吐いた。

おや、とグレゴリーが思ったのが、ジエツトはそんな姿をめつたに見せないからだ。

ジエツト・アイスマンは慎重な男である。魔術師らしいやばめの好

奇心も薄い方だし、奥さんに財布のひもを管理されてから、ますますおとなしくなった。

すでに娘がおり、D級冒険者としてこつこつと仕事をする姿は、他の冒険者に比べ安定感というものがあつた。

そして、グレゴリーはジェットのそんな大人らしいところが好きであつた。

そんな彼が、いまは何やら困つた様子である。

「新しい魔術媒体が必要なのですか？今のものに不満が？」

「いや、不満はないよ。ただ娘がね。どうしても魔術師になりたいっていうんだ」

そうか、と合点がいった。魔術師の師弟関係は割と血縁つながりが多いのである。

まず、属性という点。魔術属性の得意不得意は非常に遺伝しやすく、またジェットのように珍しい属性になると師を見つけるのは非常に困難になる。

また、他の魔術師に知られたくない秘伝も家族間では漏れにくいし、魔術師のように稼げる家庭では、魔術媒体を与えやすいといえる。とはいえ、ジェットはD級冒険者である。家族を養いながら魔術媒体をかうお金を貯めるのはかなりきつい。

もちろん、魔術師を目指すうえで必要なのは魔術媒体だけではないし、金銭関係はかなりきついだろう。

「ジェットさんが昔使っていた魔術媒体はないんですか？」

「どうの昔に売つたよ。そのお金で氷結石を買つたんだ」

「……そういえば、ジェットさんは最初どうやって媒体を手に入れたんです。お師匠さんからもらったんですか」

「私に師はいないよ。全部独学だったし、媒体を買うまでは冒険者の雑用でもしてたさ。大変だった、だから娘には楽をしてほしいんだ」
そういつて、困り顔のままジェットはふつと笑つた。

大人だな、とグレゴリーは思った。こんな家族を持てた娘さんはさぞ幸せだろう。

できることなら、手伝つてやりたい、しかし、自分にできることは

正直あまりない。

彼にできるのはせいぜい話題を変えることぐらいであった。

「しかし、独学ですか。すごいですね。魔術を師匠なしで学ぶのは相当骨が折れたでしょう」

「そりゃあね。当時の私は無学だったし、とにかく珍しい属性だったからってはいやいでしまって、ろくに文献も読まず半端な訓練ばかりしてしまったよ。だから晩年D級なんだろうね」

「としたら娘さんは幸福ですね。人生一人分のノウハウがすでにあるんですから」

自分が娘に魔術を教えている姿を妄想したのだろう、ジェットのはほがゆるんだ。

娘に魔術を教え、ともに語り合い、いずれ自分を越していく。それはいったいどれほど幸福だろうか。

冒険者に入り、あつという間にD級へ。きっと私の娘なら五年以内にC級へは入れるだろう。

そこでふと、ジェットは一人の魔術師を思い出した。

「グレゴリーくんは、アマリス・ノーフェスを知っていますか」

ジェットの何気ない質問にグレゴリーの肩が少し震える。

今、アマリス・ノーフェスを知らない冒険者は存在しないと断言していいだろう。

冒険者になってからわずか一か月でD級になった天才。秀才と言われるグレゴリーでさえ、D級に上がるのに一年半を要したほどだ。

そして、アマリスはいわゆるヒロインであるということも知っている。

「もちろん知っていますよ。『赤き超新星』でしょう？僕じゃあ到底かないっこない天才ですよ」

「君もC級なんだから十分天才ですけどね。それじゃあ、彼女がC級の昇級試験を受けたがらないという話は？」

「それは……」

当時、アマリスがD級に上がったばかりときは、何か月でC級に行けるかが、賭け事の対象になるほどであった。

しかし、昇級してから半年、昇任試験に落ちるところか試験を受けてすらいないという。

さらに不思議なのは、実力はすでにC級並みであるというのだ。一体全体、ないが彼女の足かせになっているのだろうか。邪推やくだらないわさが冒険者内にめぐっていた。中にはくだらない嫉妬によるものもある。

正直、実力のあるものがしつかり昇級されないというのは、ギルドにいらぬ不信感がつのものである。現状は非常によくはないと言えた。

とはいえ

「そこまで気にする話ではないと思いますよ」

「少なくとも『冒険者になってから五年以内にC級へ——』というジunksは守れそうだって?」

「どこるか五年以内にA級にあがれます」

グレゴリーは断言をした。間違はなく、といった様子にジェットが驚く。

「言い切りますね。さすがC級といったところですか。人を見る目に相当な自信があるのですね」

「いえ、そういうわけでは……。それにC級と言っても僕には才能がありませんから」

「私から見るとグレゴリーくんにも十分人外じみてますけど。特に体力ですね。昨日依頼から帰ってきたばかりなんでしょう。よく休暇も取らず依頼を受けに来ますよね。普通数日は休みませんか?」

「消耗品も備蓄がありますし、欲しいものもまだまだあります。それに今回は依頼ではありません。ギルドから呼び出されています」
「うへえ、それは災難ですね。C級になると、ギルドのごたごたにも付き合われますからね。お疲れ様です」

それじゃあ、といってジェットは席を立った。彼も今後の依頼を探しに来たのだろう。お金が必要なことだし。

ともあれ、グレゴリーはただ一人ギルド職員がやってくるのを待っていた。

ギルド職員は多忙であるが、ここまで人を待たせるのは珍しい。いよいよ何かあったのか、とグレゴリーが腰を浮かした瞬間、自身に向かつてやってくる二人組が見えた。

「申し訳ありません、グレゴリー様。遅れてしまいました」

「いいえ、お氣になさらず」

一人は顔なじみの職員である。冒険者として働いている以上、職員と関わらずに依頼をこなすのは不可能であり、多くの冒険者と職員は互いにある程度のことは把握しあっていた。

しかし、一方の人は見おぼえない。

そも、服装が職員ではなかった。ローブである。真つ赤なくせつけの髪。半身より大きい木の杖には、持ち手に赤い宝石らしいものが埋め込まれていた。そして何より、年若い少女。年齢はおそらく15〜16歳ほどだろう。吊り上がった眼は勝気そうな、同時に生意気そうな雰囲気がある。

「……ふんっ」

態度もまた横暴であった。ギルド職員が遅れたのも大方この女の子が遅れてきたからだろう。しかし、彼女は一言の謝罪すらなかった。

この、いかにも生意気そうな娘を、しかしグレゴリーは知っていた。

「……アマリス・ノーフェス」

「そう、私こそがアマリス・ノーフェスよ！」

胸を張ってこたえるところから、相当な自尊心がうかがえる。

反応に困ったグレゴリーは職員に視線を移す。

「それで、どういった用件で」

「ええ。グレゴリー様とアマリス様にはしばらく行動を共にしてもらおうと思います」

ギルドが冒険者に同伴を依頼する。これには様々なパターンがあるが、ランクに差があることから理由は一つに絞られる。つまり、人材育成である。

ギルドはグレゴリーに「アマリスには足りない点があるからそつちで教えておけ」と言っているのだ。

もちろん、このことはアマリス側も理解しているのだろう。これは一種の挑発である。アマリスは、グレゴリーをじろつとにらめつけた後、心底いやそうな顔で言った。

「あんたが誰かしらないけど、絶対に私に命令をしないで。いくらラ
ンクが上だからってそれだけは許さないから」
グレゴリーは早々に帰りたくなった。

炎系後輩魔術師との模擬戦

アマリス・ノーフェスは天才魔術師である。十六歳にしてD級冒険者であるどころか、その実力はC級相当であるともつばらのうわさである。

炎属性であり、魔術の火力はもちろん、様々な魔術を使い、汎用性でいってもかなり優れている。グレゴリーの使える魔術がたったの二つであることに対して、アマリスはおそらく五十を超えているといったら、魔術師としてのレベルがわかるだろう。

そんな彼女が、ギルドの指示とは言えグレゴリーに教えを請わなくてはならない。アマリスの顔が不快そうにゆがむのも仕方のないことかもしれない。

早々に帰りたがっているグレゴリーだが、ギルドからの依頼を断ると大抵ろくな目に合わない。言葉を慎重に選びながらアマリスに話しかけた。

「えっと、僕としては構わないですが、正直教えられることはほとんどないと思いますよ?」

「私もそう思うわ。でも、ギルドがあなたにつきなさいって。どうせそうしないと昇格試験を受けさせてくれないし」

「ま、待ってください。昇格試験を受けさせてくれない?それはいいみたい……」

グレゴリーは思わず職員の方を見た。冒険者ギルドの昇格試験は、確かにギルドから認められないと受けることはできない。しかし、それは実技試験中の不慮の事故を無くすためであって、わりと実力の伴っていない時から、試験自体は受けることができるのだ。

もちろん、アマリスには十二分と言つていいほどの実力はある。しかし、職員は何でもない顔でいう。

「はい。アマリス様はC級に上がる資格を有しておりますので」
職員の言いざまにアマリスはぎつと歯を食いしばった。冒険者としての気性の粗さを考えれば噛みついていてもおかしくない。

理性を抑えることができる、さらには魔術師として優秀であること

からペーパーテストに不安があるとも思えない。

いや、それとも噂はあくまでうわさであり、実力はD級にふさわしいのではないか。

思考にふけて黙ってしまったグレゴリーを置いて、職員は「それではお願いしますね」といって立ち去ってしまった。

残るアマリスはただグレゴリーをにらみつけている。

「ねえ、あんた。名前は知らないけどC級なんですよ？」

「……グレゴリー・グレゴリオ。先週上がったばかりだけどね」

その言葉にアマリスはニヤツと笑った。グレゴリーは嫌な予感がしたが、逃れるすべを持たない。

「なら、あんたに勝てば私もC級ぐらい強いってことですよ？ 簡単じゃない」

グレゴリーは少し考えたものの、アマリスの提案をのんだ。

結局戦ってみた方が早い。戦闘力に欠陥があれば指摘してやれるし、なかったら実力に問題がないことがわかる。

ただ一つ、C級がD級に負けた時の面子めんつを考えなければの話だが。

冒険者ギルドの真後ろには、ただっぴろい更地がある。一応訓練場ということになっている。冒険者の多くはだらしなく、訓練なんかしないでぶっつけ本番であることが多いが、ごく一部の人間や、新人に技術を教えたりするのに使えたりする。

中には模擬戦を行うことがあるが、前衛同士ならいざ知らず、魔術師同士になると訓練場全体を巻き込みかねない。よって、模擬戦を行うには予約をする必要があるが、今回はすでに職員が予約していた。つまり、ギルド側にとってアマリスがグレゴリーに突つかかるのも、それをグレゴリーが了承するのも想定済みであるということだ。

うすら寒さを感じながらも、準備運動をしているアマリスに話しかける。

「模擬戦のルールを決めておきましょうか」

「そうね、一撃入れた方が勝ちでいいんじゃない」

「それと、ポーションとか消耗品の類はなしにしましょう。持久戦と

かコスパが悪いので」

「……模擬戦でそこまでせいこいことしないわよ」

アマリスはしなくともグレゴリーはする。彼は冒険者だから。

互いに距離をとるとお互いが杖を引き抜いた。グレゴリーが棒切れほどの大きさに対して、アマリスはこん棒ぐらいはある。魔術媒体の質としてもおそらくアマリス側が有利だろう。

遠巻きに冒険者たちが観察している。噂のアマリスはどれほどか、新米のC級はどんな感じか。冒険者は情報が命である。あと単に野次馬根性ともいえる。

ともかく、試合に負ければ噂は一気に広まるだろう。グレゴリーはますます負けるわけにはいかなくなった。

お互いに十分な距離を取り、杖を向けあう。合図はなかった。

『爆ぜろー!』

アマリスの杖から出てきた火の玉が一直線にグレゴリーへ向かっていく。

威力に申し分はなく、無防備に当たれば十分死ねるだろう。しかし、アマリスは一切の躊躇をしなかった。仮にもC級がこの程度でやられるはずがない。

火球が直撃し、土ぼこりが舞う。避けた様子はなかった。まさか本当に？野次馬の中には悲鳴をあげる者すらいた。

『固定しろ!』

土ぼこりから出てきたグレゴリーには傷の一つすらなかった。何でもないような顔で突っ立っている。

「へえ、やるじゃない。さすがC級ってところね」

「……」

話しかけてもなお無言のグレゴリーに、アマリスは青筋を立てて、より大きな魔術のために詠唱を始めた。

『炎よ、射よ!』

今度は炎でできた矢であった。範囲こそ先ほどの火球に劣るものの、威力速度はこちらの方が圧倒的である。

ぐんツ、と伸びるように放たれた矢はグレゴリーに触れた瞬間には

ぜる。

『固定しろ』

再びの詠唱。その効果はてきめんで、やはりグレゴリーには一切の傷はない。あれほどの魔術をその身に受けたのに！

否、アマリスはグレゴリーが詠唱した瞬間に見たのである。何か透明な壁が、自身の魔術を妨げるところを。

それは属性に関係のない魔術であり、ほとんどすべての魔術師が持っている魔力壁マジックバリアではない。

からくりはわからないが、アマリスは思わず歯ぎしりをした。自身の攻撃を顔色一つ防いだ事実がアマリスの身に重くのしかかる。

同時に悟った。今は、私こそが挑戦者である。

今まで見くびっていた相手にここまで恥をかかせられたからなのか、アマリスは顔を真っ赤にして、大声で叫ぶ。

「ふぎけんな！その余裕しゃくしゃくな態度、すぐに崩してやる！」炎よ！ われの怨敵に 地獄の——」

『切り裂け！』

アマリスが大きな魔術詠唱を唱えきる前に、グレゴリーが二つ目の魔術を唱えた。

ぴゅうつ、という風の音、目に見えぬものの、魔術の脅威をアマリスは確かに感じた。

『守れ！』

アマリスは慌てて魔力壁マジックバリアを生成する。うすオレンジ色の魔力の膜がアマリスを包んだ。風は、少女の肌を切り裂くことなく通り過ぎた。

グレゴリーは首をかしげる。おかしい、今使った魔術である「かまいたち」の威力が確かに弱いのである。今までは魔術媒体なしであったにもかかわらず、今回の方がいっになく弱い。

お互い、戦いが始まった位置から動かずにいた。しかし、すでに探り合いは終わっている。

（あのグレゴリーとかいうやつ、ガードは固いけどせめつけが足りないわ。でも、腰にかけている鉈から見て、接近戦もいけるタイプ。私

がすべきことはとにかく近づけないこと！)

(魔術対決じゃあ勝てそうにありませんね。とにかく近づかないと)

この戦いの要点をすでに認識しあっているのだ。アマリスはグレゴリーの一挙手一投足を見逃さないようにらみつけているし、対するグレゴリーは腰に付けた鉞をいつでも引き抜けるようにしている。

一步、グレゴリーが踏み出した。瞬間――

『爆ぜろー!』

再び火球がグレゴリーを襲う。しかし、今度は壁に阻まれることはなかった。

グレゴリーは半身になってよけたのだ。そのままアマリスに向けて一直線に走り出す。

「ッ!?!」

魔術師は接近されると途端に弱くなる。アマリスは慌てて杖をふるい、この場に最適な魔術を詠唱し始めた。

『炎よ 膨張せよ!』

その魔術が体現するのは熱風である。殺傷能力は今までで一番低くはあるが、その範囲、グレゴリーは避けることができなかった。

『固定しろ!』

風がやむまで耐えることしかできない。けがこそはなかったが、今ので距離をとるための時間を稼がされてしまった。

『炎よ われの怨敵に 地獄の――』

『切り裂け!』

遠くから聞こえた詠唱に、グレゴリーが慌てて魔術を打つ。かまいたちは防がれてしまったが、詠唱を止めさせることはできたようだ。

試合は振出しに戻る。

アマリスはグレゴリーを倒すため必要な詠唱を唱えることができず、グレゴリーもまたアマリスの術によって接近することができずにいる。

お互いがお互いに致命傷を与えることができずに時間は経過していく。この後の試合もアマリスが魔術を一方的に唱え、グレゴリーが防いだりかわしたりしながら近づこうとする展開が続き、決着がつか

ないと判断した野次馬たちは、両者に引き分けを宣告した。

「はあっ、はあっ」

期待の新人同士の戦いに、野次馬たちが称賛をして三々五々に散っていったあと、アマリスはいまだに息を荒げていた。魔力欠乏症である。体力と違って魔力が戻るのはひどくゆっくりしたものである。息切れも長時間にわたることが多い。

グレゴリーが魔力ポーションを差し出す。

「必要でしょう?」

「ついでに!」

アマリスはそっぽを向いてしまう。完全に意地になっていただけだが、グレゴリーは気づかず到的外れな気遣いをした。

「ポーションが高いのはわかりますが、魔力欠乏症で命を落とす魔術師も少なくありません。僕のをあげるので飲んでください」

「どの口が……」

しかし、いくら拒絶しても渡そうとするグレゴリーに根負けして「……ありがと」と、ポーションを受け取りごくごく飲み始めた。

「あっ、飲み終わったらビンを返してくださいね。洗ってまた使うので」

「ぐうっ!? う、げほっげほっ、あ、あんたもしかしてこのビンって——」

「……? ああ、ちゃんと毎回洗ってるので大丈夫ですよ」

なおも杖を振り回して怒りを表現するアマリスであったが、周囲から見るとバカみたいであることに気づいて顔をしかめるにとどまつた。

「いやなやつ。そもそも戦い方からいやだったわ」

「いえいえ、今回の模擬戦、僕は防戦一方でしたし。魔術師としてはこっちの負けですよ」

「お世辞なんかいらないわ。あのまま戦っていたら負けていたのは私よ」

今回の模擬戦は、一見するとアマリスが優勢であった。戦いのほとんどがアマリスによる攻撃であったし、術のレパートリーにしてもグ

レゴリーのはるか上であった。

もし、これが本気の戦いであつたのなら、攻め続けていたアマリスが勝っていたかもしれない。しかし、模擬戦であるのなら圧倒的にグレゴリーが優勢だったのだ。

「あなた、最初っから魔力切れ狙いね」

そう、最初のルール設定を覚えているだろうか。『ポジションとか消耗品の類はなしにしましょう』。この一言のためアマリスは魔力を回復することができなかつた。攻め続けることができなかったのである。

しかし、基本的に魔術師としての技量はアマリスの方が上である。当然、魔力量もアマリスの方が格段に多い。ではなぜ、グレゴリーは魔力切れを起こすことなく戦い続けることができたのであろうか。

「それにあんたは、魔術を避けるという選択があり続けた。魔力を使わなくても魔術に対応するすべがあつたのよ。だから、私が真っ先に魔力を切らした」

アマリスは悔しそうにくちびるをかむと、目を伏せ肩を震わせた。「あなたに勝てないなら、C級に上がる権利はないわ。あきらめて、もつと経験を——」

「それは違うよ」

アマリスの言葉をきっぱりと切り捨てる。涙をためたアマリスの目を、じつと見つめ返した。

「実力でいうなら、あなたは間違いなくC級レベルです」

「でも」

「さらに言うなら、今回の問題点はアマリスさんがC級に上がれるか否かではありません。C級昇格試験を受ける権利があるかないかです。どう考えても、あなたの力が劣っているわけではないのですよ」

アマリスはずつと鼻を鳴らす。その顔を見ていると、年相応の喜怒哀楽がよく分かつた。

「じゃ、じゃあ私は何でC級試験を受けられないの?」

「……ううん。確定したわけではありませんが……」

グレゴリーは顔をしかめて考え始めた。まだ、仮設ともいえる内容

だが、彼にはアマリスの問題点が早くもわかりかけていた。

「とりあえず、アマリスさん」

「はい？」

「明日、可能な限りの装備でギルドに来てください。でないと、たぶん死にます」

「……え？」

新米C級冒険者と二つ目の任務

「それで、今回受ける任務って何なのよ」

メンバーが集まって真つ先に声を出したのは、アマリス・ノーフェスである。魔術師らしいローブ姿は髪の色に合わせたのか同じ赤色で、半身を超える大きな杖の持ち手には赤い宝石がはまられている。準備をしてこい、という命令に従ったのか、前回は持っていなかったポーチをぶら下げてやってきた。中身はおそらく消耗品の類だろう。

朝に弱いのか、目を少ししよぼしよぼさせてはいるが、彼女特有の眼光の鋭さは相変わらずである。

次に発言したのは水色の髪をした中年魔術師である。

「私もまだ聞いていませんね」

ジェット・アイスマンはD級冒険者のちようど中堅といった強さである。無理をしない性格で、その安定感から同業者およびギルドからの評価もそこそこ良い。しかし、今は訳があつてお金が必要である。

二人の視線の先には黒髪の青年がいた。二人同様に魔術師——とは言えないが、またちゃんとした前衛ともいえない、いわばオールラウンダーである。

また、この中で一番ランクが高いのもこの青年であり、他のメンバーは彼に呼び出されたに過ぎない。

名をグレゴリー・グレゴリオという。

「ええ、今回集まっていたのはほかでもありません」

まるで探偵気取りのグレゴリーを他二人があきれたような目線で見ると。多くの場合、グレゴリーは常識人ではあるが、奇人変人の域を出ないのである。おかしな言動はよくあるし、何を考えたらそうなるのかとんでない爆弾を爆発させることもある。

「僕たちで、ドラゴンを狩ろうと思ひまして」

今日もまた一つの爆弾が投下された。

ドラゴン狩り、その一言でギルド内に緊張が走る。ドラゴン種もピンキリであるが、そのすべてが狂暴。古来より調子に乗った冒険者が挑み、返り討ちに会い、死んで来た。しかし、それと同時に竜殺しは

一つのステータスであり、なしたものの将来は間違いなく安泰といえるだろう。

「とはいっても今回の討伐対象は劣等緑鱗竜レッサークリーンドラゴンですけどね」

「な、なにがですけどね、よードラゴンって時点でどんな種類でもかないつこないわ！」

劣等緑鱗竜はドラゴンの中でも最弱である。ドラゴンであるにもかかわらず空を飛べず、火も吹くことができない。しかし、成体の体は馬車よりも大きく、一つの生き物として間違いなく最強である。一つの山を平気で支配するほどの実力である。もし、数百人程度の村が劣等緑鱗竜に目をつけられたら、その土地をあきらめるしかない。それ以外の選択は死である。

「安心してください。レグドラ討伐の適正ランクはCですよ」

「そのCは上澄みの方のCでしょ！少なくとも平均的なC級冒険者が五、六人集まらないと話にもならないわ。あとレッサーグリーンドラゴンをレグドラって略すな！」

「グレゴリーくん。チームは私たち三人なのかい？」

「あと竜の死体を運ぶE級を三人ぐらい付けますが……戦力にはなりませんね」

依頼の推奨ランクには気を付けておかなければならない点がある。それは同じランクであつてもかなりの格差があるということだ。基本的にそのランクの一番強い奴と一番弱い奴の戦力差は二十五倍である。もちろん例外はあるが。つまり同じC級依頼も難易度が二十五倍ということもあるわけである。もちろん、身の丈以上の依頼を受けようとするときルドから止められるが。

「ギルドは認めてくれましたよ。めちやくちや止められましたけど」

「じゃあダメじゃない」

「ダメじゃありません。結局は認めてくれたわけですから。少なくともアマリスさんの昇級試験と違って」

グレゴリーの感じの悪い言い方に、アマリスは反論することなく黙ってしまった。よく考えずともこの依頼は無茶だ。戦力が新米C級一人にD級が二人のみ。たったの三人でドラゴンに挑むなんての

はバカのことだろう。しかし、最終的にギルドは認めた。自分は、自分が昇級試験を受けるのはこれ以上に無茶なことなのだろうか？怒りよりも、悔しさが心を支配する。

アマリスが黙りこくったのを見て、グレゴリーはジェットに視線を移す。まだ彼の意見を聞いていなかった。

「どうですか？ジェットさん」

「……考えはあるんだろうね」

「もちろん」

グレゴリーの自信満々な様子に、ジェットは思わず笑みをこぼした。

「いいよ」

「ちよつと水色のおじさん！」

「彼にも考えがあるんだろう。少なくともギルド側を黙らせるだけの計画がある。グレゴリーくんとは長い付き合いだし、私もお金が必要だね」

「僕も知人に借金を返さない」と

ちなみにドラゴンの素材はかなり高額で取引される。魔術媒体になるし、武器や防具にも使うし、秘薬にも使える。金持ちどもは頭を剥製にして飾ることもあるぐらいだ。それを三人で山分けできるとするなら、D級としては願ってもない話である。少なくとも、娘を魔術の世界へ快く迎えてやることができる。

これで二人目が賛成した。残るは一人である。

「あ、あたしは……」

「……」

「あたしは決められない」

それも仕方のないことであった。ジェットと違ってアマリスとグレゴリーの関係は浅い。そして、客観的な事実として、この依頼は受けるべきではないのである。自分や味方の戦力を冷静に分析できるからこそその判断と言える。しかし、C級であるグレゴリーが、自分に足りないものを持っているらしい彼が、全く反対のことを言っているのだ。

アマリスは、もう何もわからなくなってしまった。現実とプライドが彼女を板挟みにしていた。言葉があふれて、ゆえに何も言葉が出ない。ただ、目が泳ぐだけである。

グレゴリーは、そんなアマリスに過去の自分を重ねていた。葛藤にさいなまれてしまった人間は、もはや一人で脱出することは不可能である。そのことをグレゴリーは知っていた。

故に、今必要なのは導き手である。

「アマリスさん。では、上司としての命令です。ついてきてください」
グレゴリーの言葉に、彼女は従うほかなかった。

グレゴリー、アマリス、ジェットとE級冒険者三人は町を出ていた。劣等緑鱗竜の目撃情報があったところに向かっている。道は馬車がすれ違えるほど大きく、舗装もされているようであった。

道の両端には木々が生い茂っており、暗く、魔物による奇襲も警戒せねばならなかったが、E級はともかくD、Cの彼らにとっては話しながらでも簡単なことである。

「……それで、アマリスさんに足りない物って？」

ジェットにこれまでのいきさつを伝え終わった後、この質問が返ってきた。ジェットにはどうもグレゴリーは問題点をすでに把握しているように見えるらしかった。

グレゴリーもまたある程度の仮説はある。しかし、それにはまだ証拠が足りない。

「それにはアマリスさんに事情を聴かなくてはなりませんね」

「……」

アマリスは彼らの話を聞いているのかいないのか、ただ地面を見ているだけである。

しかし、グレゴリーは話しかけ続けた。

「アマリスさんは僕と会ったとき、最初『命令をしないで』といったのを覚えていますか。どうして、アマリスさんは命令されるのが嫌なのですか？」

不思議な質問であった。誰だって命令されるのは嫌だろう。冒険

者の、それも挫折を知らない若い娘が、『命令するな』といきがるのは自然なことである。

もちろん、冒険者としてはギルドやチームの意向には従ってもらわなければ困る。しかしアマリスは、致命的なまでに指示に従わないわけではないように思える。

「……あたしのお父さんは貴族だったわ」

そうか、とジェットは思った。ノーフェス家はそこまで大きくなくとも貴族である。今まで使用人に命令する側だったのに、冒険者になって命令されるのが気に食わない、というのは十分考えられるストーリーであった。

だが、アマリスの話には続きがあった。

「でもお母さんはそうじゃないの。あたしは使用人の娘なのよ。お父さんはあたしを愛してくれたけど、そのほかの人たちはそうでなかったわ。とくに、本家の兄弟はね、『使用人の娘なんだから命令を聞くのが当たり前だ』って」

母親はアマリスを生んだ時に亡くなってしまったらしい。父親は何としても娘を育てたかったが、家族のいじめを止めることができなかった。だから、魔術媒体を持たせて旅に出させたのだ。

アマリスは涙をこぼし、杖を握りしめながら続けた。

「あたし、命令されると家族を思い出して、それで」

「もういいですよ」

ジェットははなしをさえぎった。娘がいる身として、これ以上女の子を泣かせたくなかったのだ。

「グレゴリーくんも分かっただろう？彼女の問題点は命令を聞けないところだ」

「いいえ違います。彼女の問題点はそこではありません」

グレゴリーは断言した。他の二人はあつげにとられる。二人は信じられなかった。そもそも命令の話をしたのはグレゴリーであったし、アマリス自身心の底でさいなまれ続けていたものが、問題点ではないとされたのだ。

だが、アマリスはすでに命令を聞くことができている。ギルドの指

示でグレゴリーに会ったときから、この依頼についてくるように命令して聞き入れたことから、アマリスは問題点を理解して改善する努力をすでにしていた。『命令を聞くことができない』というのはすでに克服されていたのだ。

真の問題は、彼女自身認識していないところにある。それは——
『命令を出すことができない』ことです」

グレゴリーがアマリスと会話した中で、一番いやそうな顔したのは『命令をするなど』と命令をしたとき。アマリスが結局この危険な依頼についてくる羽目になったのは、こんな依頼やめると命令できなかったから。

「——ああ、そうよ。あたしなんで気づかなかったのかしら。本当に嫌なのは、命令をされることじゃない。命令をして本家の人たちみたいに醜くなるのが嫌だった」

彼女に命令をするときの、いやな顔。意地の悪い顔。顔に悪意をまといわせた、気色の悪い表情が頭によぎった。あんな、最低な人たちと一緒になるのはいやだったのだ。

アマリス・ノーフェスは自分の内側を真の意味で理解した。そして、命令を下せない人が、チームの頭になるC級以上になる資格がないと、わかったのだ。

「なら、何でこんな依頼を受けたの？あたしが断れないことを確認するためだけに？」

「荒療治のため、です。僕がギルドから依頼されたのは問題点に気付かせることではありません。問題を解決させるためです」

アマリスは嫌な予感がした。しかし、逃れるすべを持たない。
「劣等緑鱗竜を倒す計画を皆さんに教えます。しかし、実際の戦闘中、タイミングおよび指示はすべてアマリスさんが行ってください」

「えっ、ちよっ、いやいやいや」
彼女は首を激しく振る。たしかに、命令を出せるようになる必要がある。しかし——

「あ、あんたたちそれで死んだらどうするのよ！命がかかっているのよ」

「ええ、命がかかっているからよいのです。言ったでしょう、荒療治だって」

「水色のおっさんはどうなのよ!」

「いいよ」

「ええ……」

水色のおっさんはすでにアマリスの家庭事情を聴いて使い物にならなくなった。ただの全肯定マシーンである。親バカは他人の子供にすらバカであるらしい。そも、娘のために命を懸ける男が、こんなものに尻すぼみするわけがなかった。

「……あたしが失敗するって思わないわけ?」

「思いませんね」

「右に同じです」

冒険者は大なり小なりいかれている。彼らにとってこんなリスクは無視できるほど些細な問題でしかなかった。

アマリスは少しほほを赤くしたあと、そっぽを向いていった。

「……ありがとう」

そうやって冒険者一行は進んでいった。

グレゴリーの頭には、昔の映像が流れていた。

『僕、うまくできるかな。失敗したらどうしよう』

まだ彼が幼かった時、隣にはいつも彼女がいた。心配性な彼を抱きしめながら、決まってこう言うのだ。

『大丈夫、グレゴリーは失敗しないよ』

どうして彼女がそう断言できるのか、いつも不思議であった。今は、それが愛情のなせるものだ気づいた。

『ありがとう、お姉ちゃん』

気づいたときにはもう遅かったが。

アマリス・ノーフェスは本来、ヒロインである。主人公とともに世界を救うはずであった。

しかし、彼女はもう世界を救う必要はない。なぜなら、世界はすでに救われているから。

故に、グレゴリー・グレゴリオは少しでも多くの人間を救うために

邁進まいしんしなければならぬのだ。

炎・風・氷魔術師ども、ドラゴンを狩る

ドラゴンと言って読者諸君は何を想像するだろう。ファンタジー小説だろうか、いや、何かの映画か。変わり種でいうなら、鯉の滝登りか？画竜点睛なんて故事もある。その中で最もポピュラーなものはやはり絵本だろう。勇者に倒されてしまふ、あるいはお友達になる、子供ながらの夢であり、力強さの象徴。この世界もまたその例外ではない。

ただ一つ、こちらの世界と違う点があるとすれば、実在するということだ。

絵本から飛び出したような、という表現しかできない。緑のうろこに鋭い爪。馬車ほどの大きさでゾウなんかよりもよっぽど大きく、目はやはりは虫類を思わせるような縦長の瞳孔が見て取れる。迫力は満点だ。これが劣等レッサレグリン緑鱗竜？これが劣等？これが竜種で最弱？とんでもない！どこまで行っても竜種は化物だ。人間様のかなう相手ではない。

そのドラゴンが、行く道に座り込み、こちらをにらみつけている。相対するは三名の魔術師。グレゴリー、アマリス、ジェット。臆することなく真正面から向かい合っていた。

「たまたま道にいてくれたのはうれしいですね。誘い込む手間が省けました」

「こうしてみると緊張するものだね。竜種か、一生縁がないと思っていたよ」

「はあ、本当にあたしが指示出すの？」

グレゴリーからはすでに作戦が伝えられていた。聞いてみると、なるほど妥当性のある内容である。しかし、それを実際に試すのはまた別の問題だ。

ふう、と息を吐いてアマリスが覚悟を決める。今はただ、全員がドラゴンを見やるのみである。

開戦は、アマリスの命令から始まった。

「ジェット」

『氷よ 貫け！』

ジェットの生み出した氷の槍は、まっすぐにドラゴンへ向かい、着弾した。にもかかわず、ドラゴンには一つの傷もつかない。ただ、目を細め全身を震わせるのみである。顔をこちらに向け四つん這いの重心を後ろへ下げる。魔術師たちは悟った。やつは完全にこちらを敵と捉えた。突撃が来る！

ドラゴンが地面をける直前、いや、もっと前からアマリスは詠唱を始めていた。

『炎よ 我が怨敵に 地獄の片鱗を 見せつけろ！』

生み出されたのは両腕で抱き込めるほどの炎の塊であった。しかし、それはグレゴリーとの模擬戦で使った火球なんかでは断じてない。温度が、質が比べ物にならないほど高い。それは小さな太陽のようであった。

アマリス渾身の一撃が、突進してきたドラゴンに当たった。煙のちに出てきたのは傷ついたドラゴンであった。さすがのうろこもこの一撃を無傷に抑えることはできなかったように見える。しかし、致命傷とは言えない。そのままこちらに向かってくる。

「ごめん止められなかったっ」

自分が出せる最大威力の魔術でさえ、ドラゴンを倒すことができないおろか、突進の威力を殺しきることすらできない事実にはアマリスは驚愕し、慌てる。

もし、このまま突っ込んできたら作戦は実行できなくなってしまう。

グレゴリーは冷静に、リクヨの杖を構えた。

「十分に速度は落ちてますよ。『固定しろ』」

突然、ドラゴンが止まってしまった。いや、止まったのではない。見えない何かにぶつかっただけだ。グレゴリーは風を固定することによって見えない壁を作ったのだ。それだけでない、見えない壁はドラゴンの四方と上空を覆い、閉じ込めてしまった。

もちろんドラゴンは抵抗をする。狭さのせいで振りかぶることはできないでいるが、単純な筋力で壁を打ち破らんとしている。グレゴ

リーも冷や汗を浮かべ、壊されまいとさらに魔力を送った。が、それも時間の問題だろう。

「ジェット、早く例の魔術を！」

『水よ 御冷気を かの愚か者に 思い知らせろ』

ジェットは見えない壁に両手をつけると、ありったけの魔力を注ぎ始めた。効果はすぐに表れた。透明の壁が徐々に曇りまじめたのである。どんな馬鹿でも、ドラゴンを閉じ込めた四角の中に冷気を流し込んでいると分かる。

ドラゴンも黙っていない。両足を思いつきり壁にたたきつけ、尻尾で薙ぎ払いをしている。もしそれらを生身で受けていたら、軽く半身がはじけ飛ぶだろう。

魔力が切れる。透明の壁を生成する陸^{りくなぎ}風は強度と面積に比例して魔力を消費する。ドラゴンを閉じこめておくにはどちらもたくさん必要だ。

両手が開いているグレゴリーは、サイドポーチから魔力ポーションを二つ取り出し、飲み始めた。

もう一方はアマリスに渡し、両手の使えないジェットに飲ませてあげている。

ここからは持久戦である。しかし、残念なことに二人の実力から言ってドラゴンを凍死させることは不可能である。魔力の量としても、冷気の威力としてもである。それらを込みで劣等緑鱗竜であり、C級冒険者よりの依頼なのだ。

けれど、それはあくまで凍死までの話である。

三人が用意した魔力ポーションの在庫が切れかけた時、ドラゴンの動きがだんだん緩慢^{かんまん}になっていく。ついには反撃するのをやめて、四角の中で丸くなってしまった。

「……本当に寝た」

「はっ、はっ、はっあ。い、いったでしょう。一部のドラゴンは、冬眠するんですよ」

「げほっげほっ」

二人が魔術を解いても、ドラゴンは眠ったままだった。すべてにお

いて紙一重ではあったが、とにかくここまでは計画通り。あとは一撃で葬るのみである。

しかし、もしここで仕留められなかった場合は、この恐ろしい化物と真正面から戦う羽目になる。三人の消耗具合から見てそれは不可能だ。

グレゴリーは再び魔力ポーションをのむと、腰に下げている鉈を引き抜いた。使う魔術はかまいたちである。

前回の模擬戦で、魔術媒体を使ったにもかかわらずかまいたちの威力が低かったのは、この鉈を使わなかったからである。鉈を振る動作、生み出される風圧、知らず知らずのうちにそれら含めての魔術詠唱になっていたため、鉈を使った方が威力が高い。

しかし、それでもなお――

「――それでも、威力が足りないかもしれませんね」

「……あたしの使える魔術の中で、一番威力の高い奴を選んだつもりなんだけどね。鱗が焦げて、肉が焼けてはいるけど、命を脅かすダメージは与えられなかった」

果たしてドラゴンをしとめることができるだろうか。今ならまだ逃げて帰るという手もある。しかし、あまりに消極的すぎる。

心づもりが決まらぬうちに、グレゴリーは鉈を両手でつかみ、掲げる。

すると、アマリスが、

「やろう。あたしが魔術でサポートする。だから、グレゴリーは思いつき振り下ろして」

決意をみなぎらせた瞳で、グレゴリーを見つめた。彼女は今、命令を下していることに気づいているだろうか。

そこにはもう、トラウマにさいなまれる少女はいなかった。肩書以外に、少女とグレゴリーの差は一切なくなったのである。

すうっと二人が息を吸う。

『炎よ 聖なる祝福を 勝利の剣に まといたまえ』

グレゴリーの鉈が赤色に輝く。その次には、刀身からごうごうと炎を吹いていた。グレゴリーはそこから自身も魔力を吹き込み、風が炎

を巻き込みながら、一本の火柱となった。

天に届かんばかりの炎は、ついにその得物から解放される。

『切り裂け！』

灼熱のかまいたちがドラゴンの首を襲う。二人が放った魔術は、生命を正しく破壊し、その首を落とした。

竜殺しの完成である。同時に、少女の冒険者としての完成でもあった。

三人は黙ったままだった。やがて火柱を見た三人のE級冒険者があわただしくやってきて、竜の亡骸を荷台に積む際に当たっても、会話をしようと思わなかった。

どんな言葉も無粋であると思った。この心の内をいかにして表現できようか。すべての言葉も、今の感情の前では偽物に過ぎなかった。

黙って町まで帰った。ギルドに戻るころには、当事者とは打って変わって多くの人間が騒いでいた。あるものは羨望の視線を、またあるものは懐かしむような視線を。

声帯の硬直は、差し出された液体によって失われた。だけど誰も三人の冒険譚を無理に聞こうとはしない。ただ飲んで、ただ食べた。

結局、アマリスがグレゴリーに話しかけたのは、祝宴の終盤、皆が静まりかけた時間帯であった。

「……あたしたち、本当にやったね」

「いまだに実感がわきませんよ。竜殺しの称号なんて」

二人は視線を合わせなかった。合わせる必要を感じなかった。

深夜の静寂の中、二人は討伐した竜の話をした。初見の迫力と、場面ごとの印象と感想を語り合った。それは、先ほどの出来事が現実のものだったか確認をしているようであった。

「ジェットのおじさん、さっさと帰っちゃったね」

「一刻も早く娘に自慢したい」でしたっけ。本当に親バカですね」

「そういうところも、らしいっちゃらしいけどね。あたしのお父さんがジェットだったらなって思うよ」

「貴族のお父さんよりも？」

「貴族のお父さんよりも」

アマリスは初めてこちらを見た。口元の笑みは今まで見せてこなかった、虚勢をすべて捨てた親愛の表情であった。

「グレゴリーは近所のお兄さんかな」

「僕は家族じゃないんですか」

「身内だと、少し面倒くさい」

グレゴリーはちよつとだけ傷ついた。

「あたしね、冒険者になってほとんど躓^{つまず}かないできたから、この半年は本当につらかった」

「……」

アマリス・ノーフェスは一月足らずでD級に上がった天才だ。秀才と呼ばれたグレゴリーでさえ、一年半かけたぐらいである。ものが違う悩みにはさすがのグレゴリーも黙りこくってしまう。

「だから、あんたには感謝してるんだよ。トラウマと一緒に問題点も解決してくれたんだから。一生の恩ができたと思ってる」

「……僕たち会ってからまだ二日ですよ。酔っぱらっているんですか」

「会って二日……、そんな気しないね」

アマリスはグレゴリーの肩に寄りかかった。彼女の髪からは、名前を思い出せない花のにおいがした。

グレゴリーの腕をつかんで、身を寄せる。アマリスの整った顔が、すぐ近くに見える。

「……アマリスさん？」

「アマリスって呼んでくれない？」

「アマリスさん」

「……はあ」

彼女はグレゴリーの手をパツと離すと、適切な距離を保ってニヤツと笑った。

「残念。妹みたいに頼めば行けると思ったのに」

「あなたの妹像は少し歪んでいますね」

と同時に、グレゴリーは彼女が妹でなくてよかったと思った。もし

妹なら、自分は一生彼女のわがままを聞く羽目になっていただろう。

「そういえばなんでいつも敬語なの？」

「師匠の言いつけです。彼がすごく変わってしまして『誰に対しても敬語を使え。敬語以外の言葉は美しくない』って何度もしつけられまして」

「変なの。それに魔術の師匠なんていたんだ」

「いえ、魔術の師匠ではないんですが……」

そもそも、師匠と呼んではいるが、彼から教わったことはほとんどない。もらったものはたくさんあったが、彼の師匠は少し放任主義なところがあつた。

「そっか。確かに魔術の師がいたにしては魔術のレパトリー少ないもんね」

「ちくちく言葉は控えてください」

たった二つしか使えないグレゴリーも悪いが、五十以上使えるアマリスも頭がおかしい。

グレゴリーは身をひるがえしてギルドのカウンターに向かう。アマリスも不思議な顔をしてついてくる。

「どうして受付に行くの？ 依頼の報酬は明日まとめて送られるって言っていたじゃない」

「依頼達成の報告を」
「？」

「アマリスさんの問題点を解決することはギルド側の指示だったでしょう？ だから、完了したので報告しに行くんです」

「あつ」

忘れていた、という表情に半ば呆れながらもギルド職員に報告した。

報告自体はあつさり終わった。もつとこまごまと顛末を説明しなければなるまいといきこんでいたが、「ああ、確認しました。お疲れ様です」の一言で終わってしまった。グレゴリーは少し釈然としないまま、アマリスの方に向き直ると、なぜか彼女は泣きそうになっていた。「うぐつ、……あたし、もうあんたと何の関係ないけど、見かけたら話

しかけてもいい?」

「別にギルドの指示以外でアマリスさんと話したくないわけじゃないですから」

「困ったことがあったら頼っていい?」

「僕もそうします」

「じゃあ早速なんだけど、C級昇級試験の紙面試験どんなのが出るか教えて」

「……他の知り合いから過去問見せてもらっていないんですか」

「あんた以外知り合いない」

本当に手間のかかる妹みたいだな。その言葉を飲み込んで、過去問を渡すことを約束した。

そういえば、とグレゴリーは昔のことを思い出した。姉は自分のことどう思っていただろうか。いや、アマリスよりはうま

くやっていた自信はあるが。

かつて、グレゴリーと彼の師匠と姉、三人で暮らしていた家には、すでにグレゴリーしかないことを思い出して、彼は少しだけ帰るのが億劫になった。

さらには、ガラクタでとっ散らかった家の中から、過去問を探さないといけないこともその億劫さに拍車をかけていた。

こうして、新米C級冒険者グレゴリー・グレゴリオの二つ目の依頼を終える。

先輩C級冒険者『生存』

陰気臭い部屋であった。ガラクタが床に散らばり、決して狭くない面積を圧迫していた。テーブルにはうず高く積み重ねられた本があり、それらすべてが読みかけか未読本である。

テーブルの隣には年季の入ったソファがあり、一人の青年が横になっていた。

グレゴリー・グレゴリオである。

「ぐっああ」

体を起こして伸びをした後、読んでいたまま眠ってしまったであろう手元の『薬草百珍』を、テーブルに積まれているものの頂点に積みなおした。

劣等緑鱗竜を倒してから二日目。昨日はギルドから依頼金とドラゴンを売った素材代を受け取り、アマリスに過去問を渡した。

また、依頼中に使った魔力ポーションは、元となる薬草がまだ手元にあつたため作り直した。グレゴリーは簡単なポーションなら自分で作ることができ、そのための器具もそろっていた。

身支度をして外に出る。あいにくの曇り空であったが、グレゴリーはこの上なく機嫌が良かった。もちろん、昨日から懐が温かいからである。ギルドによって知人に少し返すのもよいだろう。全部は無理だ。お金がいくらあっても足りない。

ギルドに入ると、汚い金髪をした冒険者がギルドの受付に怒鳴っている。いつものことなのでスルーして依頼が張っている掲示板に向かうグレゴリー。

聞き耳を立てるつもりはなかったが、あまりに大きな声だったからか金髪の話が嫌でも聞こえてくる。

「だ・か・らッ！なんでこんなカスみてえな依頼を受けることができねえんだ!?!こんなもん下手したらD級だけのパーティーでも攻略できんぞ」

「ですから、依頼主側に不審な点が見受けられたため、念を込めて、ということとして。C級以上の冒険者を二名以上つける必要があるん

ですよ」

ギルドも大変である。冒険者はとにかく学がない。さらに短気なので気に食わなかったらとにかく噛みつく。計画とか立てられず、お金とかすぐ使ってしまうんだろうな、とグレゴリーは自分を棚に上げた。

「んでそんなクソみたいな理由で俺が割を見ないといけねえんだよ!?! C級の俺に、D級も複数人つけてる。てめえらあの愚図どもに劣等緑鱗竜の依頼出していたじゃねえかッ。俺たちだけでも十分だろおっ!?!」

ついさつきまで他人事であったが、今の一言は間違いなく自分を指していると感じた。グレゴリーとしては無視を決め込んでもいいのだが、冒険者は体面が命である。周囲もここにグレゴリーがいることに気づいたから、口を出さざるを得なかった。

「愚図で申し訳ありませんが、よろしければ一緒に依頼を受けましようか。僕もC級なので」

グレゴリーが近づくと金髪は黙ったまま職員に視線を送った。職員はさすがグレゴリーの顔を覚えているのか、あからさまにほっとした。

職員はグレゴリーと金髪を会議室に連れていき、依頼の詳細説明、後は互いの自己紹介のための機会を設けてくれた。正直、グレゴリーとしても人目のない方が気楽だった。金髪は何も言わずに従っている。

まずは依頼の内容を、と概要を話始める。

「依頼の内容はガウント村周辺に生息するグレーウルフの討伐です」「グレーウルフ、ですか」

グレゴリーは少し拍子の抜けた返事をした。金髪もその反応にへん、と鼻を鳴らす。

グレーウルフ。群れで生活する狼型の魔物であり、雑食。性格は臆病であり、戦闘力も低い。単体ならE級レベルであり、群れ全体であれば平均的なD級から最大規模でC級に届くか届かないぐらいである。

はつきり言つて、金髪の言い分はもつともである。ただでさえC級がでていて、さらにその上複数人のお供までつけているとなると、止められる要素は本来ないはずである。金髪も非が相手側にあるのいいことに『自分はちゃんとギルドに反抗できますよ』というアピールを込めて抗議をしていたのかもしれない。こちらに火の粉がかかるのはいい迷惑だが。

「はつきり言つて、それなら戦力は過剰ですよ」

「いいえ、まだ足りません。グレゴリー様にも念のためパーティーを組んでいただきたい。あと三人ほどお仲間を探してください」

「おいっ、いい加減にしるよてめえ！」

金髪がまたしても怒鳴り散らかす。グレゴリーからしても職員からしてもそれは虚勢を張ったポーズであるのはわかりきっていたが、金髪はなおも続けるようだ。

「依頼の報酬金を見たか。ただでさえすぐねえのによ、人数が増えたらその分報酬がすくなんだろうがッ。それともなんだあ、てめえらギルドが払ってくれんのかよ」

品のない脅しに、職員はしばし思案すると、驚くことにその要求をのんだ。

「いいですよ。追加の報酬をギルド側からお支払いしましょう」

金髪が驚く、グレゴリーもまた同様である。ギルドというのはあくまで仲介者であり、依頼人と冒険者を結び付ける以上のことは基本的にしない。

故に、ギルド側から報酬の追加を行うのはかなり異例の子であった。

グレゴリーはなんだか嫌な予感がしたが、金髪は金もらえるとなると上機嫌になって、黄色い歯をむき出しにして笑った。

「それならいいんだよ。最初っからそういえ」

「ただし、依頼内容も追加させていただきませよ。それは村人に犠牲者を出さないことです。わかりましたか」

追加された依頼もさほど難しいことのように思えなかった。金髪も同じことを思ったのかにやけっづらをやめない。

「それではお二人との自己紹介に移りましょうか」

「僕から始めましょう。と言ってもあなたはすでにご存じでしょうが」

「ああ、知ってるぜ。『害虫』グレゴリー・グレゴリオだろ。竜殺しおめでと。俺の名前はフィスト。天才様は知らないと思うが、二つ名は

――」

『^{サバイブ}生存』、でしよう?」

「へえ」

フィストの名前は知らなかったが、C級の容姿と二つ名ぐらいはグレゴリーも把握していた。

彼の役割はシーフであり、トラップの解除や斥候^{せっこう}などを担当する。チームにいるシーフの質によつて生存率が大きく変わるとは、どれだけ学のない冒険者であつても知っていた。

C級になつてからまだ二年しかたつていないが、冒険者歴はすでに十五年を超えている。依頼達成よりも自分自身が生き残ることを優先するスタイルは、依頼主からは評判が悪いものの、冒険者としては必要なものではあつた。

あるいは、彼のそういったところを知っていたから、ギルドは彼単体で送り出さなかつたのかもしれない。

「天才様に覚えていただけで光栄だねえ」

「僕なんてまだまだだひよっこですよ。なんせ愚図^{ぐず}ですのぞ」

「おおい根に持つなよ竜殺しさまあ?あれはよお、言葉の弾みだよあんたもわかんだろお?冒険者には大言壮語を語らなけりやいけねえときがあんだよ」

フィストは身を乗り出すといやそんな顔をしているグレゴリーにかまうことなく、熱弁をふるつた。

彼のスタイルの先ほども述べたとおりだが、それ以外にも特筆すべき特徴というものがある。それは非常に詭弁を多用するという点である。正確に言うなら自身を正当化しやすいということだ。

「冒険者は体面が大事だ。あんたもそれをよおく分かつてる。だから文句を言つてる俺の前に出てこざるを得なかつた。それなのによお、

こんなふざけた内容を言われちゃったたら、文句を言うしかねえ。でないと周りになめられちゃう。ただでさえ、俺ア周りの冒険者に嫌われている。理由はわかかってるぜえ、俺の生きざまのせいさ。けどよお、生き残るつてのがそんなに悪いことなのかよ。誰だつてそうだろ？なら、誰を犠牲にしても生き残るの不思議な話じゃねえ。犠牲にされちゃう方が悪いのさ。そいつらが愚図で、考える頭を持たねえからさあ。あんたはどう思うよ。あんたはよお、俺のことお悪く思ったりしねえよなあ。これから仲間になるんならよオオ！」

「わかったので落ち着いてください！」

グレゴリーは飽き飽きしながらも、彼の大まかな性格を理解した。おそらく仲良くするのは不可能であろう。なるべくかかわらないことを決意し、とりあえず依頼の日程を決めることにした。

「日程はどうしましょうか。ガウント村までは結構距離があるので今日は無理ですね」

「お前のチームを探さないといけねえしな。まあ、この町からガウント村まで、一般人で二日、冒険者で一日つてところか。出発は明日だな」

「ずいぶんと急ぎますね」

確かに、依頼内容からして一刻も早く村に駆け付けたくはあるが、フィストがそんなことを考えるととは思えない。

不思議そうにするグレゴリーを見て、彼は見た人を不快にさせるような笑みで続けた。

「宵越しの金は持たない主義なのさ」

この点に関しては、全くグレゴリーも同意であった。

依頼の詳細を聞いたのち、二人は明日の待ち合わせをして解散した。お互い親睦を深めるつもりはなかったし、相手側は深めるための金も持ち合わせていなかった。

グレゴリーはギルドの食堂を見渡し、知った顔がないか確認すると、どうだろう。見たことのあるハゲと水色のおっさんがいるではないか。むろん、ハントとジェットである。

ジェットのことは語るまでもないと思うから、ハントについて少し

説明しよう。

D級、大剣使い、ハゲ、おっさん。以上だ。

大股で彼らに近づくと、グレゴリーは何の説明もしないままいきなり本題に入った。

「依頼を受けてください」

「いいぜ」

「いいよ」

恐ろしいまでの友情であった。あるいは馬鹿どもであった。冒険者はたまに頭がおかしくなったりする。

「そういえば、ジェットさんは何でここにいるんです？劣等緑鱗竜を倒したなら当然依頼なんて受けなくていいでしょうに」

「それを君が言うのかい？いやね、まとまったお金が手に入ったから、娘の魔術媒体を買う決心がついたんだけどね。完成するまで時間がかかる上に、貯金が消えっちゃったし、最初の方は娘につきつきりで魔術教えたいしでもうちよつと稼いでおきたいなって」

「それでいうなら、グレゴリー、てめーの方が予定入れすぎだろ。お姫さん届けて、竜殺して、次は何だ？最後に休んだのいつだよ」

「昨日休みました」

「一日じゃねえか」

突っ込みはするものの、受付の騒動をすでに知っているらしく、グレゴリーが依頼を受けること自体は納得しているらしい。

とりあえずは、グレゴリー、ハント、ジェットといういつも通りの面子ができてしまったが、ギルドからの指示ではあともう一人必要である。

「アマリスさんは昇格試験に向けて勉強に励むそうですし、あともう一人どうしましょう」

「バランス的にはどれでもいいな。新人でも入れるか」

「ならルルスとか」

「いいですね」

「るるしす？」

ジェットの提案にすぐ反応したグレゴリーと違い、ハントはまだ人

物を把握できていないようだ。頭をひねって思い出そうとしている。すかさずジエツトが特徴を述べる。

「ほら、黒髪で、目元まで隠れてて、大楯使いで」

「んー」

「胸が大きくて」

「ああ！」

「最低ですね」

最低だった。

ともあれ、たまたま近くにいたルルシスの声をかけてみることになった。

ルルシスとの関係は深いわけではない。何度か依頼が一緒になったことがあり、トラブルもなく解散をするのを繰り返しただけである。しかし、回数を重ねることではか信頼というものは築き上げることとはできない。その点でいえば、すでに彼らの間では一定の評価をお互いに与えていた。

まずはグレゴリーが会話をしに行く。ハントは交渉事が苦手だし、ジエツトはハントが無駄なことを言わないか注意する係で忙しい。

「こんにちは、ルルシスさん。調子はどうですか」

「っス」

「そうですか。ところで一つ依頼を一緒に受けていただきたいのですが」

「っス」

「内容はですね、ガウント村にいるグレーウルフの討伐です」

「っス？」

「ええ、そこにいるおじさんたちと僕です。あと、フィストさん達ですかね」

「っス」

「ありがとうございます」

ルルシスは基本言葉を発することはしない。グレゴリーたちは理由を尋ねたことはないし、たずねる必要もないと思われた。発音や声の高さを聞けば何を言っているのかはわかる。

彼女を連れておじさんズに向かう、ハントは首をかしげているが、これは三人の中で唯一ルルス語を解さないからである。ハントはとことん頭を使うのが得意ではない。

「相変わらず何言ってるのかわかんねえな」

「それはハントだけです。私とグレゴリーくんはわかります」

顔をしかめるハントであったが、残念なことにはここでは彼が少数派であった。

ともかく、集めるべき人数は達成し条件を満たすことはできた。グレゴリーはチームメンバーに必要な荷物と集合時間を伝え解散ということにした。

帰路に就くグレゴリーであったが、心中には一抹の不安がとぐろを巻いているのを感じていた。

不安、複数の要因で成り立っている。軽薄な男フィスト、異例な対応をとるギルド、不信感がつのる依頼元。どれをとっても、此度の依頼が普通でないことを指し示している。

彼にとって見えない敵というのはドラゴンよりも恐ろしいことであつた。

と、考えながらふと笑う。考えすぎだ、敵はグレーウルフだと言われているはずである。神経質にならないよう、自分が作ったポーションの中でよく眠れるものをのんで、なるべく早くベットの中に入るところを決めた。

こうして、夜が過ぎていく。

新米C級冒険者と三つ目の依頼

ガウント村の地理を説明するにはまず、グレゴリーたちの住む国の話をしなくてはならない。

この国ユウ王国は国として中くらいの規模であるものの、冒険者たちの質は先鋭中の先鋭と言ってもいいだろう。王都にはもちろん、その四方に配置された四つの街にも優れた冒険者が集まっている。

一つの街の名前を『ワイズ』。これがグレゴリーたちが拠点とする場所である。

ガウント村はユウ王国の辺境も辺境、周りには険しい山に囲まれていて、全体から見てもあまり重要な村であるとは言えない。敵国に攻められる心配はないが、山から下りてくる獣や魔物にひどく手を焼いていた。

人口は約三百人ほど。村の特色といったものもなく、ただ国境を維持するために存在している。

そんな田舎に続く道へ、八人の人間がいた。全員がほぼ走るように歩いているが、荷物を装備も重そうであり、通常の人がまねをしたらすぐにばててしまうだろう。

もちろん、その面子の中でも息を切らしている人もちらちら見える。

「休憩にしましょうか」

そう言ったのは黒髪黒目のC級冒険者グレゴリー・グレゴリオである。同様にこの中で一番高いランクであるフィストは、黙って彼の意見に賛同した。息を切らしている冒険者の大半はフィストが連れてきたお供であったからだ。

グレゴリーが空を見上げると、太陽がちょうど南に上っていることに気が付いた。お昼時である。休憩のうちにご飯を済ましてしまおうと提案すると皆がうなずいた。

疲れているのはフィスト以外のお供たちと、ルルシスであったが、彼女はまだましであると言えた。なぜなら、彼女が本来持っていたはずの大楯はグレゴリーが運んでいたのであり、また、移動をするにあ

たつてはその方が効率的であると思えた。

しかし、フィストは考えが違うらしく、「一番下つ端が一番荷物を持つべき」と言つてきかなかつた。そのせいで、彼のパーティーメンバーが真つ先に息を切らすのが、当のフィストは何の注意を払わずに、グレゴリーがしばしば休憩を提案する羽目になつた。彼は意地でもグレゴリーに借りを作りたくないらしく、あくまで依頼の達成が遅れることを彼のせいにしたいらしかつた。

彼の金髪同様に汚い思想ではあつたが、余計なことをしないで済むのである。

「大丈夫ですかルルスさん」

「つうす」

「まだゆっくりしててください。昼食は僕たちで作ります」

まだ少しつらそうにしているルルスは休憩させながら残り三人、グレゴリー、ハント、ジェットはせつせと昼食の準備を始めた。

グレゴリーはバックの中から火付け用の魔道具と折り畳み式のなべをジェットに渡した。ジェットは焚火の下地を作り、鍋に彼の魔法で氷を張つた。ハントがとりあえずの薪をジェットに渡すと、長期にわたり使用される分をまた取りに行った。グレゴリーは自身の知識をもとに食べられる山菜をとつてきた。

冒険者の旅路になべを使うのは珍しいことと言えた。実際、フィスト一行が食べているのは、干した大根や魚の薫製、高級なものでも塩漬けにした肉といったモノである。

わざわざ火をつけてスープを作るのはグレゴリーのほぼ妄執もうしゆうと言つていいほどの執着からくるものである。

温かい食べ物ほそれだけで人々を救う。かつて孤児であり、愛を与えられることなく路地裏をさまよつていた経験は、何ともおかしな方向へこだわりを生み出させたのである。

沸騰したお湯の中にベーコンと山菜を入れ、グレゴリーの手作りである特別のスパイス、いわゆるコンソメと呼ばれる粉末を加える。お湯が少し黄金色に光る。葉物が青くなると、各々が準備したポウルにスープをよそいながら食べ始めた。

「いつも通りにうまいな」

「っスー！」

ルルシスはこの中でも一番グレゴリーと一緒にいる時間が少ない。特性スープを食べる機会もあまりなかったからか、嬉しそうにスープを掻き込んだ。

残りの三人にとってはもはやいつも通りになりつつあったが、ハントは他の冒険者に見せびらかすように飲んでいたので、グレゴリーとジエツトが冷たい目で見ていた。

ごくつと喉を鳴らしたのはフィスト側の誰か。しかし、頭同士が、敵対とまではいかないものの警戒しあっている中、「俺にもくれ」と厚顔無恥こうがんむちにいえるものはいないようである。

リーダーであるフィストが立ち上がり、こちらに近づいてくる。どんな時であれ、彼はにやけつつらをやめることがない。実に人を不快にする笑顔である。

鍋を中心にし、囲むように座っているグレゴリーたちの間に割って座り、あろうことか、どこからか取り出したボウルに、ずうずうしくスープをよそい始めた。

たまらずハントが非難する。

「おい！何勝手に食ってんだよ」

「食つちやいけないって言われてねえなあ」

「みんなの分はさすがにありませんよ」

「あん中で食うのは俺だけだぜえ」

グレゴリーのやんわりとした拒否も、なんともないような顔でいなす。

そも、食べるのがフィストだけであっても食わせる道理はない。グレゴリーは無理にでも追い出してやろうと思ったが、どうせ屁理屈をこねられて居座られるだけである。

グレゴリーは頬に手をやり、少しばかり考えを巡らせた後、スープを飲む許可を与えた。ハントが眉間にしわを作りはつきりと嫌な顔をしたが、フィストはそれに気が付かなかった。

会話らしい会話もなく、ただ気まずい空気の中、スープをすすする音

が響く。グレゴリーはいっそのこと、今回の依頼についてお互いの考えを聞こうと思った。

「フィストさん。ガウント村の依頼についてはどう思います?」

「どう、と言われてもなア」

彼はおどけるようにして首を傾げ、何でもないように、濁った目をグレゴリーに向けた。

「普通の依頼だと思っただぜえ」

とバカにしたように答えた。もちろん、今回の依頼が普通であるはずがない。ギルド側の異様な対応と言い、内容に比べて過剰な戦力と言い、すべてが不吉な予感を感じさせた。

少なくとも、同じC級であるフィストが違和感すら覚ええないというなら、昇格試験はもう一度見直すべきである。

くくつと笑って、フィストは続ける。

「冗談だ。はつきり言っつて、ガウント村には何か秘密があるなア。けどやることは単純だ。俺たちで解決できそうな案件なら解決する。できないならア、帰る」

ひどく不誠実に思えるが、ギルドには以下のような規則がある。

仮に依頼主が虚偽の報告をし、その難易度が想定より高く、自身の力で解決が不可能な場合、依頼を達成できなくとも失敗と捉えない。

この点でいえば、正直グレゴリーも賛成であつた。冒険者として当然の行いである。誰だつて騙された上で働きたくない。

だから、できればもう一つ踏み込んだ話をしたかつた。

「では、村の秘密とは何だと思えますか」

「くくつ、俺ア、おそらく人狼だと思つてる」

人狼。アンデットの一つであり、太陽が昇っている間は人間であるにもかかわらず、夜になると二足歩行の狼に変身してしまうものである。聖水か、聖職者による祈りによつて解呪されるが、人狼にかつたまま本人が死んでしまうと、ただ暴れまわる怪物になってしまう。そうなるのはもう戻しようがない。

「おそらく、親しい人が人狼のまま死んでしまつてえ、その被害をグレーウルフのせいにしてんだろオ。俺たちはア、ただ確認をしてギルドに

報告すりゃアいい」

筋の通った話で合った。必ずしもこれが真実である保証はないが、可能性は十分にあるだろう。人狼は恐ろしいが、しかるべき対処をすれば心配はないし、戦力的にもC級が二人いれば間違いはないだろう。そういうわけで、フィストは楽観的であった。

一通りの話を聞いて、グレゴリーは胸の中を支配する不安の正体が本当に人狼なのか確かめた。ワイズを出てくるときのいやな予感とは果たしてその程度のものであったろうか。彼は自分が心配性なのを自覚していたが、それでも考えずにはいられなかった。

一つ、ありえない仮説が脳裏によぎった。今回の敵。今の戦力ですらかなうかわからない相手。荒唐無稽な話ではあるが、共通の危機を皆と共有せずにはいられなかった。

「僕の推測では相手は人狼ではありません」

「じゃアなんだってんだよ」

「……ミメシスウルフ」

瞬間、空気が凍った。誰もが食べる手を止めてグレゴリーを見る。フィストははじめ口を開け呆けていたと思うと、すぐに顔を赤らめ、早口で、そんなことはあり得ないと否定した。

「グレーウルフとミメシスウルフを見間違うはずがねえっ！てめえが神経質なイカれ野郎だってことは知っているが、その妄想に俺たちを巻き込まないでくれッ」

そういうやいなや、フィストは元の場所に戻っていつてしまった。ミネシスウルフは単体でもD級相当の強さをほこり、賢さや体の大きさ、群れとしての練度もグレーウルフとは比べ物にならないほどだった。群れの大きさにもよるだろうが、通常の大きさでさえB級であうのが常である。これではいかにC級二人であろうと太刀打ちできるはずがない。

しかし、グレーウルフとミネシスウルフを見間違うことがあるだろうか。大きさはグレーウルフより一回り大きく、色は季節によって変わるが、この時期では木に擬態できるこげ茶色。灰色などと見間違える可能性はない。住人が虚偽の報告をしたのだとしても、その必要性

はどこにあるというのか。ただ、村を危機にさらすだけである。おおむね、フィストのように否定するのが正しいのだろう。

ただ、グレゴリーは常に最悪を予想しなければならなかった。これは彼の悪癖であり、時として彼自身を神経衰弱に陥らせることも多々あるが、冒険者として生き残ってきた最後の砦でもあった。

鍋の後始末をしているルルスに目をやると、彼女は一生懸命に焦げを落としている最中だった。彼女はすでに一人で暮らしをしている自立した人間だが、かといって大人ともいえない年齢であった。彼女の年齢で働いている人もたくさんいるが、少しでも親が裕福であったりすれば、まだまだ守られる対象である。

人の命が自分の手にあつて、一つの指示であつけなく散つてしまうことに、グレゴリーは強い恐怖を抱いた。C級になり、人の上に立つ側になったものの宿命である。

「っス?」

「ああ、何でもありません」

じつと見ていたことに気が付いたのだろう、彼女は不思議そうな顔をしてグレゴリーの方を見た。彼女は座つて作業をしていたのでこちらを見上げるような形になる。そのせいもあつてか、ルルシスの体はいつにもまして小さい。

彼女は何を考えているのであろう、と思った。小さな頭の中で、大きな目で何を見て、善なる心でどう判断しているのだろう。彼女から見て自分は頼りになる人物であろうか。

グレゴリーは人の本質をとらえるのが得意であつた。裸一貫で冒険者になつたときも、表裏のないハントや、冒険者の中で最も常識的であるジェットに近づき、ノウハウを身に着けたのは彼の観察眼あつてのものだった。

その眼をもつてすると、フィストやその腰ぎんちやくの軽薄さや浅さというものはとるに足らないものである。自身が彼らのために頭を悩ます必要はなく、配慮も無駄であることは明白だった。グレゴリーは悪意に強かつた。

しかし、その分彼は純然たる善意にひどく弱い。とくに弱者の善意

である。強いものは自分が何をしようと強く羽ばたいていくだろう。アマリスがそうである。他にも、すでに完成された善意、ハントやジエツトに対しても、一切の遠慮がないという点で、グレゴリーは非常にやりやすかった。

打って変わって、ルルシスはどうかだろう。彼女はまだ弱く、関係もまだ浅い。だからこそ、彼女の期待や信頼はうれしいとともに、少しばかり重かった。

黙ったままである姿に、ルルシスも何か感じ取ったように笑った。

「先輩なら大丈夫っスよ」

ひどく小さかったが、グレゴリーは初めて彼女の声を聴いた。驚きのあまり目を大きくしていると、やはり恥ずかしかったのか、ルルシスはすぐ人見知りをする幼子のように、顔を赤くして下を向いてしまった。今度はグレゴリーが笑う番であった。

「ありがとう」

後輩に気を使わせて、激励をかけられるのは少し情けない気もしたが、初めて会話をしたことが彼はとてもうれしかった。どんなに鈍感であっても、信頼の成果であると分かるからだ。

再びグレゴリーが笑うと、ルルシスも笑った。二人はしばらく声にならない笑い声をあげると、出発のために準備を始めたのだった。

冒険者一行とガウント村

ガウント村はさびれていた。家に使用されている木材暗く、所々が剥げてささくれ立っている。一部の家は壁が壊れているのに直さずにいるし、窓の奥から人々が監視をするような目でこちらを見ていく。彼らの疑り深い性格は、異様な状況だからかもしれないが、辺境の土地なれではの新しいものへの敵視かもしれない。どうやら歓迎はされていないようである。

民家と民家の間が十分に離されていて、それが逆に住民同士のコミュニケーションを分断しているように見えた。もちろん、木製の住宅であることから、火災が広まらないようにと、先人の知恵が含まれた対策ではあるが。民家の隣には小屋や畑などがあるが、今はすべてが荒れ果てている。特に小屋の方ではもともと鶏を飼っていただろうが、無残に羽が散っているだけで鶏は一匹もいなかった。

「これは……」

思っていたよりもひどい。皆が同様に思っていたことだが、誰も続けることができなかった。ただ一つ分かっていることは、俺たちの相手はグレーウルフではない、ということだ。思わぬ未知の敵に皆が震える。この状況で冒険者は大きく二つのものに分かれた。より冷静になるものと、恐怖にとらわれてしまうもの。グレゴリー、ハント、ジエツト、フィストが前者であった。

震えるルルシスを見たグレゴリーは、他の冒険者よりも一歩、大股で歩き前に出た。C級は冒険者の手本として扱われることが多いし、チームの頭の一人として、けん引していくのも役割の一つである。

グレゴリーの行動に影響されたのか、心なしか皆の表情も明るくなる。ただ一人フィストだけが最後尾についている。むろん、少しでも生存率を上げるためである。

一応、今回の依頼主はガウント村全体である。依頼が複数人のグループから出ている場合、対応や詳細に代表がつくことになっている。今回はおそらくガウントの村長だろう。通常であれば、案内人がいて村長宅まで連れて行ってくれるが、いないものはしょうがない。

村の中で一番大きな建物を探す。たいていのしようもない権力者は自身の威厳を示そうと、何でもかんでも大きくしたがる癖がある。家も例にもれない。

村の入り口からまっすぐ道に沿っていくと、村の中心ぐらいだろうか、面長の平屋が見えた。大きさはもちろん、周囲にある飾り、いわゆる盆栽やつぼなどからも格が高いのがわかる。もちろん冒険者一同は芸術のげの字もわからないため『生活に無駄なものが多い家』を権力者の家であると認識している。

「すみません。ワイズから来た冒険者です。村長さんはいらつしやいますか」

グレゴリーの呼び声に反応したのか、玄関が開き中から若者が出てきた。頬がふつくらとしていているが、それは健康というより食生活の乱れを表しており、おびえるような目をしながらも、くだらない自尊心と、相手が自分より格上か格下かを見定めようとする姿勢がうかがえた。中肉中背の村人は最初グレゴリーを見てバカにしたような顔をしたが、隣にいるハントに気づくとすぐに猫なで声をあげた。

「へへっ、村長に話は聞いてます。内でまっつらつしやいます」

自分のものでもない権力をかさに着て、いざとなると相手にこびる姿勢はフィストと腰ぎんちゃくたちを思い浮かべるが、当の本人たちは軽蔑をした顔を村人に向けているので本人たちは気づいてないらしい。

この村にしては豪華な玄関をくぐり、通された場所は道場を思わせるほど広い、仕切りのない部屋であった。おそらく、村の集会などの会場になっているのだろう。奥には十人ほどの男たちが座っており、真ん中には村長らしい五十代ほどの初老の男性がいた。

「ようこそおいで下さった。そちらの頭はあなたですか」

「俺じゃねえ」

「僕です」

案の定、ハントとリーダーを見間違えられ、少しだけグレゴリーは傷ついた。が、これも仕方ないことだろう。年功序列がはびこる世の中において、ほぼ完全に実力主義である冒険者はかなり珍しいのである。

る。なお、フィストはリーダーの一人だと名乗り出なかった。責任をグレゴリーに押し付けるためである。

村長は自らをガウントと名乗った。代々自身の一族が村の名前を冠するガウントを背負っていくと、鼻高々と自慢されたが、興味なかったし、村の名前と被るので冒険者一行は村長と呼ぶことにした。グレゴリーも自己紹介を終え、さっそく本題に入った。

「それで、僕たちは村の惨状を見ました。どう見てもグレーウルフの仕業ではありません。このままですと？の報告をした、と捉えざるを得ません」

「そうじゃなあ。確かに相手はグレーウルフではないの」

あつけからん、と村長が言った。しゃがれた声にかかわらず、子供じみた開き直りに薄気味悪さを感じる。表情はむしろ楽しげでさえあった。

「てめえっ!？」

「落ち着いてくださいハントさん。理由はもちろんあるんですよ」

ハントの暴走を収め、グレゴリーが続きを促す。冒険者側はハントと同意見であり、敵意をにじませている。それに対して村人側も各々の武器に手をやり、こちらをにらみつける。剣呑な空気が漂う。

村長の顔色が先ほどまでと違って真っ赤に染まる。「理由じゃと？」と、当たり前前のことを聞かれたように、あるいはこちらに非があるように、大声でがなり始めた。

「そちらが悪いんじゃないやろうがッ！この俗物どもめッ。Cランク一人雇うのにどれほどの金がかかると思っておる？貴様らがわしら田舎者の足元を見て、法外な費用をかすめ取ろうとするからじゃろうて！」

まったくの詭弁であった。当然だがギルドは相手に対して値段を変えることはない。都会であろうと田舎であると平等に接している。そも、田舎者に対してのあざけりなどは、冒険者にとってそれほどあるわけでない。冒険者はすべての物事を馬鹿にするが、「強いものが強い」の精神は出身や人種によって区別することの愚かしさを承知している。

村長の発狂に冒険者一同は何も言えなかった。無言を肯定と受け

取ったのか、村長は話を続ける。

「そも、件の原因はすでに対処済みじや。貴様らに来てもらったのは、こやつを引き取ってもらうためじやよ」

合図とともに、奥にある扉から村人があるモノを持ってきた。グレゴリーは最初それが何なのかわからなかった。この清潔に保たれた、広く無駄の多い空間に似合わないぼろ雑巾のように見えた。

だから、その正体が分かったとき、グレゴリーに限らず隣にいたルルス、あるいはハントでさえ絶句をした。少女である。全身が薄汚れ、口は切れ、所々に打撲の跡がある十代に届くか届かないほどの少女であった。

「うあ」

「っ!?!」

少女の苦しみの声に思わず、ジェットが飛び出そうとする。無理もない。少女の年齢は彼の娘と同じぐらいであった。いや、ジェットに限らず他の、少しでも善意の心があるものは手を震わせ、ルルスはすでに涙さえ流している。

しかし、グレゴリーはその誰をも、あるいは自分の心さえも制し、黙って座った。状況を理解するために、あるいは少女を救うために、いまするべきなのは対立ではなく話し合いであることを強く理解していたからだ。ただ一人、フィストは何でもないうように座っている。「見ればわかるじやろうて、この邪悪なる耳を。この人狼めが魔物を操り、ガウント村を襲わせたのじや」

少女には確かに、見慣れない部位があった。それは頭部に生えた耳であり、犬の、あるいはオオカミの尻尾であった。獣人である。いたいけな少女は人間と狼二つの性質をあわせもつ、狼の獣人であった。ワイズや王都などでは見慣れたものではあるが、田舎では確かに物珍しくもあった。

しかし――

「村長さん、この人は人狼ではありませんよ。人狼と獣人は全く異なるものです」

人狼はあくまでアンデットである。生きてる人間に取り憑き、夜間

だけ表にでてきて暴力をふるう。だが、昼間は人間のままであるし、月が出ているときも完全に二足歩行の獣になるため、少女のように耳やしっぽだけ獣になることはない。また、獣人、および人狼は魔物を操ることは決してない。

そのことをグレゴリーは村人全員に説明した。残念なことに少女を殺しても現状が良くなることは決してない。今すべきことは、魔物の情報を共有し、必要とあれば外部に助けを求めることである。にもかかわらず、愚かな老人は聞き入れず、一方的にこちらをなじった。

「わしを愚弄するのでも大概にしておらおう！原因はこやつじや、わしらを田舎者だと、世界を知らぬ愚か者だと見下し、さらなる金を求めるかつ。これは差別じゃあつ!!でてゆけ、でてゆけええっつ」

老人の哀れな妄言に、もはや誰も耳を貸すことはなかった。これ以上ひどいならば、話を聞く筋合いもない。グレゴリーが腰を浮かした瞬間、村長の後ろにいたひとときわ背の高い青年が一步前に出ていった。

「もうやめにしまししょうガウントさん。あなたは長い間この村を支えてきましたが、今のあなたは村を危険にさらしかねません」

「な、なにを」

青年のほか、村人たちはあきれたように村長の腕をつかみ、この場から退場させようとした。すべての人が村長に対しての尊敬を失っていた。もともと、村長の言い分は半信半疑だったのだろう。それが今や、対策という対策はすべて無駄であったと分かった。誰かが責任を負わなくてはならない。そのための権力者であつて、そのための村長なのである。元村長は最後まで何かをわめきながら、若者たちに引つ張られて消えてしまった。

「これからは俺の時代だ」

一番最初に前へ出た青年が新しいかしらとなったのは、おそらく決められていたことだったのだろう。先ほどまで村長が座っていた場所にどかっと座りながら、こちらを向いた。

「見苦しいものを見せた、申し訳ない。しかし、これからは大丈夫だ。頭の固い老人は去り、今から俺がガウント村のトップだからだ」

名前をナンドというらしい。新しい支配者の登場に、しかしグレゴリーは一切の期待をしていなかった。なぜなら、謝罪をしていた顔は新しい権力に酔い、あくどい、先ほどの村長と同じ顔をしている。今彼は、村の危険よりも自身の権力をいかに盤石ばんしやくにするかしか考えていない。グレゴリーの目には村の権威が愚か者から愚か者に移っただけに見えた。

「結局、僕たちの相手は誰なんですか？魔物というのは」
「ミネシスウルフだと思われる」

何でもないようにナンドは言った。冒険者は恐れおののく。やはり、最悪の事態になってしまった。グレーウルフを狩るつもりがとんでもない依頼である。何より、村人たちが危険性について一切把握していない。たった今、ミネシスウルフの気分によって攻められてしまえば、それだけでこの村は全滅してしまうだろう。

「村には緊急時に他の地域と通話ができる魔法具が配置されているはず。今から助けを呼ぶので案内していただけですか」

ナンドは顔をしかめた。おそらく、ここまで大ごとになるとは思わなかったのだろう。事態を最小限に抑えられなければ次に退場するのは彼である。しかし、ナンドは魔法具を渡すことができなかった。村長が昔売ってしまったらしい。現状は打つ手なしに思えた。

一度、少女の手当の時間を含め休憩することになった。むろん、その間に何か対策を打たなければならない。ジェットとルルスは傷の手当、ハントとフィストの中着たちは、警戒および地理の把握として村人に案内してもらいながら村を見てまわる。

ミネシスウルフの対処法についてグレゴリーが考えていると、今まで沈黙していたフィストがこちらに近づき、話しかけてきた。この状況にいつてさえ、にやつけつらをやめない。

「グレゴリーさんよお、もういいんじやねえかア？」
「いって何がですか」

「だからよお、こんな村見捨ててさっさと出ちまおうぜエ。先に約束を破ったのはあっちだ、帰っても文句は言えねえだろオ」

確かに、最初はそういう計画であった。さらに言えば彼の二つ名は

『^{サヴァイ}生存』。自らの生存にしか目がない彼にとって、この提案は当たり前のことなのだろう。しかし、グレゴリーは彼の意見に賛成するわけにいかなかった。

少女を一生懸命に治療するルルシスを見つつ、グレゴリーは自身の原点を思い出していた。それは少しでも犠牲を減らすこと。世界を救うことのできない彼にとって、弱者が大勢すむガウント村を見捨てることはできなかった。

「はつきり言って、死ぬぞてめエ」

フィストの半ば殺意のこもった眼に、それでもグレゴリーは意見を变えることがなかった。すると、意外なことにフィストの方が空気を緩め、いつもの笑みに戻り、黄色い歯をさらしながらこう言った。

「なら一つ作戦があるぜえ」

ガウント村に入ってから多くのクズを見てきたが、哀れな弱者がいないとも限らない。少なくとも少女がいたし、また、彼女を必死に守ろうとするルルシスの、ジェットやハント、自身のうちにある大切な何かを失うわけにいかない、グレゴリーはフィストの作戦を受け入れることにした。

C級と獣人と睡眠ポーション

「え、えっと、す、少し右、ですっ」

獣人の少女はリーコスというらしい。彼女の治療が終わり目覚めた後、ルルシスとハント、ジェットとリーコスを背負ったグレゴリーが山を登っていた。

フィストの考えた作戦は、案外突拍子のないことでもなかった。しかし、作戦を成立させるために必要なものがあり、それらの採取のためグレゴリー達は山を登らざるを得なかった。また、同様にリーコスも必要であった。

すんすん、とグレゴリーの背中中で鼻を鳴らす少女は、狼の獣人である。普通の人間と異なる点は多々あるが、その中で最もわかりやすいのは嗅覚である。彼らの探す植物『白白根』しろしらねは特有のにおいがするのが特徴であり、リーコスにとって探し当てるのはとても簡単であった。

もつとも、グレゴリーには一つ心配なことがあった。

「あの、僕汗くさくさくないですかね？獣人の方って嗅覚が人間の何倍もあるって聞いたんですけど」

「え？えっと。だ、大丈夫ですよ？そつそんなににおいしませんし、グ、グレゴリー、さんのはむしろいいにおいです」
「っす？」

確かめるようにルルシスが近づき、においをかぐ。女性二人ににおいを確認されるという通常ではありえない場面に、グレゴリーは何も言えず黙ってしまった。なんだか、何を言っても不正解である気がするのだ。おっさん二人が彼を見てけらけら笑う。

「私もかいでいいかい？」

「俺も」

「黙っててください」

割と危険な状態にもかかわらず和気あいあいとしているのは、自然への恐怖よりあの村にいることの億劫さの方が勝るからだろうか。フィスト一行やガウント村にいたところに比べ会話がよく回る。明る

い空気に安心したのかりーコスがおずおずと質問する。

「し、白白根なんて何に使うん、ですか」

「睡眠ポーションを作るのに使えるんですよ。原材料ですね」

白白根は強い睡眠作用がある。昔から睡眠薬として採取され、今でもよく使われている。グレゴリー自身何度も世話になっっているが、体感として微量の中毒性がある気がする。まあ、これもご愛敬である。

回答をもらえたものの、なお怪訝そうな顔をするリーコスに今度はジェットが解説する。

「別に私たちが服用するわけではないよ。ミネシスウルフの罨用だね。睡眠ポーションを塗った肉塊を置いておいてわざと食べさせておくのさ」

「そ、それはわかりますけど」

人間ですら独特なおいだと思う白白根。それを肉塊に塗った程度でミネシスウルフが食べるだろうか。少なくとも、やつらの嗅覚はリーコスと同等であるのに。

だが心配はないとジェットは伝える。

「白白根は正しい手順を踏むと無臭の睡眠ポーションになるんだよ。魔剤師ポーションの資格を持つているのなら簡単に作れるのさ。そして、グレゴリーくんはD級魔剤師の資格を持っているからね」

魔剤師におけるD級とは、「一般的なポーションを作成でき、一人で店を構えることができる」という定義で、大半のポーション屋はこのランクである。リーコスは尊敬のまなざしをもってグレゴリーを見た。

「す、すごいですね。私の村にいた、グレアおばさんも、た、たしかDランク、だった気がします！もう、亡くなってしまいましたけど」

「……そうですね。今回、睡眠ポーションを作る際はグレアさんの道具をお借りさせていただきます」

作戦実行のため、グレゴリーたちはあらかじめ機材の確認をしていた。問題なく使えるだろう。その際村人に聞いた話だが、グレアという人物は唯一偏見なしでリーコスと接してくれる人物であったらしい。毎日、グレアの家を訪れて、ポーションを作っているところを眺

めながら会話をしていたらしい。

「もしよければ、一緒にポーションを作りますか？」

どうしてこんな言葉が出たのかグレゴリー自身にもわからなかった。ただ、リーコスがグレアの話をするとき悲しげであっただろうか、なんとなく、そうすべきだと思った。

突然な申し出に、リーコスはしばらく目を丸くしたが、すぐ「はい！」と元氣よく返事をした。

「いいなあ、私も早く娘に魔術教えたいなあ」

「まずは生き残ってからだな」

「っス」

そのあとすぐに白白根は見つかった。ついで、食べれそうな山菜や木の実、他のポーションに使える薬草なども採集し、ガウント村に帰った。

グレゴリーたちが山に行ってる間、フィストたちは村をパトロールすると言っていた。正直疑わしくあったが、意外なことに村の青年たちとフィストの腰ぎんちゃくたちが仲良くしていることから、事実であるらしい。

さらに、フィストがあれほど嫌いっていた村の代表の青年ナントと話し合いをしている。

「何を話しているのですか」

グレゴリーが近づくとナントはあからさまに嫌な顔をした。その表情に嫌な予感を感じたが、フィストはいつものようにへらへらしてこちらを向いた。

「よく帰ってきたなあ。遅かったからてつきり死んじまったかと思っただぜえ。なに、ただの話し合いだよ。夜間のパトロールに村の男性諸君も参加してくれるらしくてなあ」

これもまた以外である。この村の人が自分の身を危険にさらしてまで、大勢のことを慮るとは全く思わなかった。これはいったいどんな魔法を使ったのだろう。あるいはフィストの「詭弁使い」としての本領を發揮したのかもしれない。

「僕はポーションを作成してきます」

「じゃあ俺たちはパトロールに加わろうか」

「っスー」

「了解」

そう言つて、ハントたち三人は去つていった。残つたグレゴリーとリーコスは何も考えずに向かう。まだ何がを歩いて歩けないリーコスであつたが、背中の上で楽しそうに村を案内した。

何年も手入れをされてない家であつたが、建物の役割は果たしていたらしく、中はほごりが積もっているものしつかりしていた。軽い掃除をして、大釜に水をくむなどの準備を終えた後、グレゴリーはさつそく製薬に取り掛かつた。

「ど、どうして、グレゴリーさんは、冒険者をしつづ魔剤師の資格を、持つているのですか？」

比較的汚れていない布団にくるまれたリーコスが、遠慮がちに聞いてきた。耳をぴくぴく揺らす姿が小動物みたいでかわいらしい。しかし、投げかけられた質問をグレゴリーは正しく返すことができなかった。

「……いろいろありましてね。もともと様々な分野に手を伸ばしていたのですが」

「な、なんとなく、理由分かりますよ。誰かの、ためですよね！だつてグレゴリーさんは、優しい人だから」

「いいえ、違います。全部自分のためですよ」

苦々しく答える。グレゴリーの顔に浮かぶのは後悔の念であつた。たしかに、回復ポーションしかり、魔剤師というのは治療に適している。しかし、当時病氣だつたのはグレゴリー自身であつた。ただ、肉体的にはない。精神の、である。今から約二年前、グレゴリーは多くの人間から『頭の病氣』であると言われていたのである。

すり鉢に白白根を入れゆつくりとすりつぶす。鼻に透き通るような独特なおいが強くなる。

「私もー私も、みんなからおかしいって言われます。変なしつぽだつて、あ、悪魔の子供だつて。唯一認めてくれたのはグレアおばさんでした」

そこまで一気に言うのと、リーコスがグレゴリーにすがると、どこか期待するような視線を送る。

「グ、グレゴリーさん。私を昔救ってくれた人が、魔剤師で、きつ今日、私を救ってくれたのはあなたです。こ、これが偶然だと思えますか!? あ、あ、あなたは私の救世主ではないのですか!?!」

少女の切実な助けの声に、グレゴリーは思わず手を止める。グレゴリーはどうしたらよいのかわからなかった。ただ、英雄を見るかのようにならざるを得ない。何も言えずにいた。彼は自分が英雄だと思わなかった。なぜなら、世界を救った英雄は既に存在していて、また彼女本人に彼もまた救われたのだから。しかし、少女の希望を掴むことも彼にはできなかった。

「まだ、村はミネシスウルフの群れに囲まれています。完全にあなたを救ったとはいえません」

そういつてリーコスの頭をなでると、なるべく彼女の顔を見ないように目を背けながらポジションづくりにいそしんだ。明らかに答えをはぐらかされたリーコスはふくみつつらになりながら、それでも笑って答えた。

「なら、救った後に」

そうしてすぐ、リーコスは眠ってしまった。

グレゴリーは十分な睡眠ポジションを作り、ファストに手渡した後、多くとってきた薬草を使い回復ポジションを作った。単純作業をしていると、とりとめのない記憶が浮き沈みするように現れた。

『君、親はどこにいるの?』

『わからない』

『家は?』

『居場所もない』

『なら、私と一緒にだね!』

急にやってきて、自分の姉を名乗り始めた彼女は、グレゴリーの救世主だった。自分はいったい、リーコスにとっての救世主になれるだろうか。なる資格があるのだろうか。いまだ彼女の背中も見えないのに。

すべてのポーションを作り終えたら、あたりはすっかり暗くなっていた。元グレアの家にグレゴリーのチームは集まる。ルルシスの手にはスープの入ったなべがあり、どうやら村人一同がグレゴリーたち冒険者に作ってくれたらしい。

「あいつらが俺たちに飯を作るなんて意外だな」

ハントの言葉に皆が同意する。どうにも、冒険者、とくにグレゴリーたちが彼らに嫌われているらしい。にもかからず、こうやってご飯を作ってくれるのは以外であり、はつきりいて不気味でさえあった。

「さすがに村のピンチだしね。彼らも協力するしかないのさ」

「っス」

ジェットの言葉にルルシスが賛成する。彼女は真つ先にスープをよそい、見ていてさすがらしいほどの食べっぷりを見せてくれた。ほほえましいが、しかし、グレゴリーはいまだに嫌な予感がしていた。彼のしかめっ面に気づいたジェットが肩をたたく。

「グレゴリーくん。そんなに気を張らなくていいよ。ポーションは完成したんだろう？ 罨がある以上ある程度は大丈夫さ。どうしようもなかったら、それこそ考えても無駄だし」

「っスー！」

「それはそうなんです。罨の様子もまだ見ていませんし。どうにも違和感と言いますか」

「そういう罨を見てないな。フィストの野郎ちゃんと仕掛けたのか？ おとりに使う肉をつまみ食いしてんじゃねえだろうな」

不信心。ハントは一切彼らを信じていなかった。いや、彼が信じているのは今なべをかこっているグレゴリーたちだけである。あとは正直、誰が裏切ってもおかしくないだろう。

「っス？」

「まあ、こんな状態で裏切るほど彼らもバカではないよ。ハント、むやみにグレゴリーくんの不安をあおるようなことをしないでくれ。ルルシスさんも、真正面から受け取らなくていいよ」

ジェットは場を仕切って、ぎつくばらんに言い切った。次にグレゴ

リーに視線を移す。

「グレゴリーくん。君の長所がたくさん考えることなのは間違いないよ。でも、同じくらい短所でもある。ゆっくり休む時は休むべきだ」
ジエツト、ハントの二人はグレゴリーの心の調子が悪い時期を知っていた。ハントはあまり気づかないができないタイプだがジエツトは違う。子供にもものを教えるようにゆっくりとした声で、またいつくしむような目で諭されると、グレゴリーは何も言えなくなってしまうのだ。

「ふあつスう」

「俺も飯を食ったら眠くなってきたな。リーコスの布団はどこから出てきたんだ？俺は多少汚くてもいいからさっさと寝たいぜ」

「そうだね。私たちのパトロールの当番はそろって早朝だし、ここらへんで眠るとするか」

ルルスはあくびをしながら布団を敷いた。合計五人が川の字になって眠るには少し狭いが、寝れないことはないだろう。

「それじゃあ、お休み」

明かりを消した。

グレゴリーは気になる点がたくさんあって、とても眠ることはできないと思っただが、案外まぶたが重くなつて寝付けそうであった。これなら無理に睡眠ポーションを使う必要はないだろう。

他も面々も村人の対応につかれたのか、それとも久々の布団だからか、すぐに眠ったようである。

もうすぐ寝てしまいそうな頭で、グレゴリーは考えた。自分は考えすぎているのだろうか。その自覚は自分にもある。しかし、いやな予感を決して消えることなく、むしろ時間がたつたびに大きくなるのである。

グレゴリーはそんな考えを断ち切つて目をつむった。案外簡単に寝れたのが不思議だった。そして、自分の心配は結局正しかったことを知るのだ。

そうして夜が明ける。

詭弁使いと愚図ども

「グレゴリーさん、グレゴリーさん!? た、大変ですっ、起きてくださいっ」

リーコスのかげとともにもグレゴリーは起床する。事態の把握に一瞬時間をかけ、現在がいかに異常であるか理解した。

冒険者は基本的に、とても睡眠に気を付ける。野宿の際は見張りを配置するとはいえ、緊急事態に対応できるように小声で声をかけられなくても覚醒できるようになっている。たとえ村の中にといても、かなり驚異的な魔獣に囲まれている以上、警戒を解くことはない。

しかし、グレゴリーたち四人全員がそろって寝ていた。時刻はすでに約束していたパトロールの時間をとつくに過ぎている。

「リーコスさん! 状況はどうなっていますか」

寝起きにも関わらず即座に思考を巡らせ、現状を把握しようとするグレゴリーに合わせて、他の三人も慌てて武器など戦闘の準備を始めた。

「は、はい! ファイストさん達含めた、村人の、ナントさんを中心とした若い人たちが、み、見当たりません! どこを探しても、いないんです」
「クソっ!」

ハントは悪態をつく。あまり賢くない彼でさえ現状を理解していた。つまり、ナント達を含めたファイストはこの村を見捨てて逃げ出したのだ。今村にいる村人は、逃げるには遅すぎる人、あるいはその家族たちだろう。

「村人を集めてください。場所は村長の家です。お願いできますかリーコスさん」

「わかりました!」

慌ててリーコスが飛び出す。グレゴリーは今にも死にそうな顔で、しかし、思案することをやめない。現状を突破するために必要なこと、一つ一つ積み上げていく。それでも、彼の手は震えていた。

「申し訳ない、グレゴリーくん」

突然、ジェットはグレゴリーに対して謝罪をした。グレゴリーは何

のことがわからずにキョトンとするが、すぐにその理由を理解した。「君は昨日の夜から考え事をしていた。それを無理に断ち切ったのは私だ。勝手に父親面をして君を含む大勢に迷惑をかけてしまった。どうか許してくれ」

「最後にその意見を聞き入れたのは僕です。だから、責任があるのは僕の方ですよ。それに、ジェットさんが寝ることをすすめていなくても、結局結果は変わりませんから」

「っス？」

「どういうことか、と首を傾げたルルスに、グレゴリーはチームと状況を共有するため、そして本人も思考を整理するために一から説明をすることにした。

「僕たちはそろって寝坊をしたわけではありません。眠らされていたんです」

「眠らされていた？」

「ハントが聞き返す。彼はこのチームの中で一番頭の出来が良くないので、彼に理解できるよう説明するのが一つの水準になるだろう。

「いつ、だれが、どうやってだよ。俺たちはみんな自分の意志で寝たんだぜ」

「昨日の夜、フィストが、スープの中に、です。僕が作った睡眠ポーションはもともとこのために作らされたんでしようね」

「気づけるはずだった、今になってグレゴリーに後悔が生まれる。フィストが自分の生存度外視で村を救う決断をしたこと、雑な作戦に、睡眠ポーション、山から帰った後のナントの態度、やけに協力的な村人たち。違和感なんてたくさんあった。敵はミネシスウルフだけではなかったのだ。グレゴリーはそのことに一番最後まで気づけなかった。

「しかし、だとすると何で睡眠ポーションなんだろうね。毒殺でも全然おかしくなかったのに。それに、フィストだけで逃げ出すこともできたのに、なんであのナント達も連れて行ったんだろう」

「毒殺にしなかったのは、僕たちがミネシスウルフの足どめに最適だったからでしょう。ナント達はいざ襲われたときの肉壁ですね」

最初っから最後まで、フィストは生き残ることしか考えていなかった。瞬時にこちらを裏切る算段をつけ、関わることを嫌がっていたナントの懐に入り込む。まったくグレゴリーとは異なった才能、C級たるゆえん。生存能力とは、つまりそういうことであったのだ。

「とにかく、村の状態を知らないことには始まりませぬね。リーコスさんに村人を集めてもらいましたから、話を聞きに行きましょう」

グレゴリーたちおよび村人は、元村長の家に集まって話し合いをすることにした。代表のいなくなった村人たちは、頼れる人たちをなくしたからなのか、あるいは敵対できる状況にないからなのか、正直かつ協力的に話をしてくれた。

わかったことは以下のことである。

夜間にパトロールをしに行つた若者およびフィストたちが帰つてこないこと。彼らの荷物はなく、家はもぬけの殻であったこと。睡眠ポーションや罠に使うはずだった肉塊がなくなったこと。

「睡眠ポーションは私たちに使われたとして、肉塊も？」

「リーコスさん。それは村までミネシスウルフが侵入したということではなく？」

「は、はい！わ、わたしの鼻ではお肉のにおいは、ま、まっすぐワイズの方からしています」

このことを聞いたグレゴリーは、目線を遠くにやって何やら考え込んでしまった。そんな様子をじれったく思ったハントは、荒々しくも今すべきことをまとめた。

「つまり、俺たちは小細工なしでミネシスウルフを倒さねえといけなわけだ。フィストの奴らがワイズについて救援を呼んできてくれるかもしれないが、やってくるまでは俺たちだけでな」

応援が来るまでの間、ミネシスウルフが襲ってくる確率はかなり高い。そもそも、肉塊を用意して誘い出した方はこちらなのだ。さらに言えば、村の中でも戦力になりそうな青年たちは全ていなくなっている。残った村人たちに戦闘を期待することはできないだろう。

「私たちだけで、村をミネシスウルフから守れるか……。かなり難しいだろうね」

「……っス」

「いえ、必ずしもそうではないかもしれませんが」

期待のこもった目線が一気にグレゴリーに集まる。彼はあくまで可能性の話であったし、彼の手柄は何もなかったので話したくはなかったのだが、説明するほかないだろう。そう、口を開きかけた。瞬間。遠吠え。

「——っ!?!」

誰かのどを鳴らしたのか、しかし、思いはみな同じであった。ついに来てしまった! 奴らは、冒険者の応援を待つことなく、村人たちを食い物にしようと侵入してきてしまったのだ!

背筋を凍らせ誰もが絶望をしている中、グレゴリーだけはさっさと立ち上がり、チームメンバーに指示を出した。

「行きますよ。村人の皆さんはなるべく一か所で、外に出ないようにしてください」

「なぜそう冷静なんだ! ガウント村はもうおしまいなんだぞ!」

村人の一人が声を荒げた。しかし、グレゴリーは気にした様子もなくただ「まだわかりません」と答え、家から出て行ってしまった。

遠吠えは、礼儀正しくも村の入り口からした。全員が覚悟を決めて村の外に出た。そこにはこげ茶色の狼が十匹、やはり、敵はミネシスウルフだった。

「よかった」

グレゴリーのセリフにルルススが驚愕する。ルルススだけでない、ハントもジェットも意味が分からないという顔で彼を見た。しかし、当の本人はまるで本当に救われたような顔をしていた。

「最悪の事態は免れた」

三人は今すぐにでも、彼の真意を尋ねようとした。しかし、魔物たちは彼らに時間を与えず、襲い掛かってきた。

戦闘開始である。

『固定しろー!』

十匹の狼がまっすぐ四人に突っ込んでくるのを、グレゴリーは見えない壁を作り、狼たちを二分にした。壁の内と外、五匹ずつに分けら

れたことに動揺したミネシスウルフのすきを見逃さず、四人は戦闘の構成を整えた。前方にルルスとハント。後方はグレゴリーとジエツトである。

「僕は魔術を使っている間、あまり役に立つことはできません。五匹ずつしとめていきましよう」

「了解」「りょーかい」「っす！」

二匹がルルスに、三匹がハントに向かう。ミネシスウルフが跳躍をしたと思うと、ルルスの首筋めがけて一直線に向かってきた。彼女は自身の盾を上を持ち上げ、魔獣を吹き飛ばす、が

「ルルスさん！足元！」

「っ!？」

盾も持ちあげたことにより生まれた死角をつき、もう一匹が足元を狙ってかみつく。ルルスは軽く飛んでかわした。

相手の死角を理解し、仲間と連携する賢さ。さらに、相手が逃げ辛くするため真っ先に足元を狙う狡猾さは、今まで戦ってきた魔獣とは比べ物にならないほど知性を感じさせる。

二匹を相手にルルスは防戦一方、ハントの方もかなりきつそうだ。このままでは負けてしまうだろう。もっとも、魔術師のことを考えなければの話だが。

「ジエツト！」

ハントはわざとらしく姿勢を崩す。空いたスペースにミネシスウルフは好機とばかりに突っ込んでくるが、後方からいきなり氷の槍が投げ込まれる。頭部に突き刺さり、動かなくなった。連携をするのは、何も魔獣だけではない。

「二匹目」

グレゴリーはリクヨの杖をふるったまま、透明な壁『陸凧』リクナギを発動し続けている。五匹の狼は壁を引っかいたり突進を繰り返しているが、突破されるにはまだ時間がかかりそうである。

ジエツトは地面に手を付けると、グレゴリーに一つお願いをした。

「グレゴリーくん、合図をお願いします」

「わかりました」

手を付けたまま、ジェットは深呼吸をした。大きな魔術を使う際、心身を落ち着かせるためのもの、例えるなら重い荷物を持つ前の覚悟のようなもの、を一気に終わらせ、多くの魔力をつぎ込む。

『氷よ 御冷気を かの愚か者に 思い知らせろ！』

「今だ！飛べっ！」

ハントとルルスィスがその場でジャンプすると、地面が一気に氷始まる。ミネシスウルフの動きを完全に止めることはできないが、わずかながら足を止めることができる。そして、ハントはそのわずかな隙を見逃さなかった。

「うらあッッ」

また一匹、真つ二つになり地面に転がる。わずかに痙攣するが立ち上がることはなかった。

「二匹目」

さすがに焦ってきたのか、ミネシスウルフたちの動きが単調になってきた。一匹がまっすぐにルルスィスに突っ込み、はじかれる。

『氷よ 貫け』

はじかれた先に飛んできた氷の槍を、一度見ていたからか何とかかわす。しかし、背後にいたハントには気づけなかったのか、大剣によつて胴体と頭は切り離されてしまった。

「三匹目」

何とか三匹、この分では何とかかなりそうだ。そんな油断がいけなかったのだろう。胴体から切り離されたミネシスウルフはそのまままっすぐにルルスィスへ向かい、そのふくらはぎをかみちぎってしまった。

「っあッ」

「ルルスィスさんっ」

倒れこむルルスィスに残りの二匹がとびかかる。一匹はわき腹に食いつき、もう一匹はとどめを刺そうと頸動脈にかみつこうとする。しかし――

『切り裂けえッ』

リクヨの杖から放たれた不可視の刃が今頸動脈に食らいつこうと

するミネシスウルフの頭部を弾き飛ばす。グレゴリーはそのままルルスに近づき、わき腹に食いつく狼を蹴つ飛ばした。

「っは、っは、っは」

右足と左わき腹から血を流すルルスを見て、グレゴリーは見ることにできなかった。血が出すぎている。このままでは死んでしまう。荒い呼吸がルルスの体がいかに危険であるかを雄弁に語っていた。血だまりがグレゴリーの靴を汚した。荒っぽく上下に動くルルスの胸が、苦しそうに呼吸をする息が、グレゴリーを責め立てた。

「グレゴリー、あとにしろ」

ハントがこちらに向かって何かを言った。グレゴリーは聞き取ることができなかった。ただ、自身の鼓動しか聞こえなかった。

「グレゴリーくん、残りの六匹がこっちに来てる。早く、君が指示をするんだ」

ジェットもこちらに何かを言った。でも、グレゴリーはジェットのことを見なかった。ただ、ルルスのことを見ていた。ルルスの目を見ていた。その眼は、あの時と一緒だった。

『先輩なら大丈夫ですよ』

「っ申し訳ありません。指示を出します。僕とハントさんは前線、さらに前に進みます。ジェットさんはルルスさんの治療をお願いします」

「了解！」

新しい前衛組は何も恐れることはないようにまっすぐに突っ込む。ミネシスウルフたちもそれを察したように足を止めた。

「作戦は？」

「ルルスさんには時間がありません。早くちゃんとした治療を受けさせないと。だから——」

「速攻だな!? りよーかいッ」

幸いなことにジェットは氷属性だ。止血という点で彼より適任な人はいないだろう。速攻で倒せば何とかなるかもしれない。しかし、間に合うだろうか。グレゴリーは一切の邪念を捨て、いかに相手を手早く倒せるかに思考をシフトした。

ただ、殺意をもって目の前の敵を駆除せんと、人間と魔獣は今全く同じ心持になったのだ。

ガウント村とミネシスウルフの決着

グレゴリーはただまっすぐにミネシスウルフたちのもとに向かい、手元の鉞を引き抜き、振るった。鉞はオオカミを切断し、一つの生命を終わらせたが、大振りであつたため隙ができてしまった。足元を狙う攻撃を陸^{りくなぎ}風で防ぐが、もう一匹の攻撃をかわせず左手にかみつかれてしまう。血しぶきが上がる。鉞にこびりついた血が、人間のものか魔獣のものか判別がつかなくなる。

「五匹目」

三匹のミネシスウルフを相手にしながら、一連の流れを見ていたハントにグレゴリーは目で合図を送った。ハントは少しの間迷ったが結局覚悟を決めたように、右足を差し出す。当然のように噛みつかれる。

「つつああーくっそいてえっ!?!けどよ、噛んでる間は何も出来ねえよな。体のどこかにかみつかせておけばよ、相手にする数は減るよな!?!」

三対一が二対一に。噛みつかれた狼を無視するように、ハントは一匹をしとめる。ハントのワンアクションが終わり、動きが停止した瞬間を狙ったミネシスウルフを背後からグレゴリーが襲った。

「六、七匹目」

ミネシスウルフは戦況の不利を悟ったのか、動きが消極的になる。グレゴリーの左手、ハントの右足に食いついていた狼も素早く外し、距離をとってしまった。グレゴリーの左手は血を流し、いまだに止まることはなかった。

「おい、左腕大丈夫なのか」

「動きませんね。ハントさんこそ右足は」

「俺はちゃんとすねあてをかませたよ。狼どもが及び腰になった、こっちもゆっくり攻めるか?」

「いいえ、時間がありません。先ほどのように速攻で」

「いやいや、グレゴリーは飛び出してしまった。ルルシスの容体がわからない以上、こちらは攻めるしかないのだ。動かない左腕と、

グレゴリーよりはましだがけがをして十分に動けないハントの右足で、なるべく早く奴らをしとめるしかない。

それを知ってか知らずか、ミネシスウルフは攻撃をかわすようになった。右腕だけで鉞をふるっているのもあるだろうが、相手側はすっかりカウンター狙いになっている。こちらに余裕がないことを知っていて、より焦らせるための時間稼ぎである。

グレゴリーの攻撃をミネシスウルフたちは完全に間合いを読み切り、右へ左へ避けていく。攻撃にハントが加わっても均衡は崩れず、魔獣たちはぎりぎりの距離で人間たちの攻撃をかわしていく。しかし、それがいけなかった。

「ハントさん、頼みましたよっ」

グレゴリーが大きく足を踏み込む。当たれば一撃で、と思える大振りには、しかしミネシスウルフのバックステップによってかわされてしまう。あとは、三匹から攻撃を食らっておしまいである、はずだった。

『切り裂け』

刃をふるった軌道の延長線上。本来届かないはずの空間に、風の刃が届いた。

魔術師は基本、魔術媒体なしでは魔術を使えず、また、体を大きく動かしながらの使用も、集中力の関係であまり現実的ではない。しかし、ことグレゴリーのかまいたちは、鉞を振る動作とセットの魔術。本来の魔術師では悪癖とされることであっても、彼にとってはそれが一番集中しやすい形であった。

「八匹目」

だが、戦闘はまだ終わっていない。一匹をしとめようと残り二匹が残っている。大振りを放ったグレゴリーを前に、ミネシスウルフは容赦なく、右腕にかみつこうとした。しかし、その一撃も防がれてしま

う。

「さすがです。ハントさん」

ミネシスウルフはなぜ忘れていたのだろうか、青年の隣にいるこの大男に。狼の視界に彼の姿が映った瞬間、大剣により彼は絶命した。

「九匹目」

残り一匹。だからと言って油断をしていたわけではなかった。グレゴリーはこう考えていた。あと一撃なら陸風りくかぜで防げる。いや、防げなかったとしても致命傷さえ気を付ければ死ぬことはないだろう。今更、四肢の一本ぐらくれてやる、どこからでも来るがいい。だが、最後の一匹はもはや目の前の敵に一切、目もやらなかった。ただ、彼らの背後、一番弱っている彼女を標的にしたのである。

「ジエツトツ」

ハントの叫びに気づいたジエツトが、ルルシスをかばうように前へ出た。しかし、間合いはすでに狼のもの。魔術を使うにはあまりに遅い。

『氷よ——』

詠唱を唱えるきる前にミネシスウルフがジエツトの首筋にかみつく、もしこのまま頸動脈をかみちぎられれば、簡単に失血死してしまうだろう。もっとも、もしもの話だが。

『——奪いたまえ』

噛みつかれた瞬間、ジエツトはミネシスウルフに手を当てつつ、詠唱を完成させた。魔術師は当然接近されると弱い。だからこそ、接近された際の切り札は、一つや二つ持っているものである。彼の場合は触れた対象を凍らせるの魔術である。デメリットは数えきれないほどあるが、人間はともかく狼程度の大きさならば瞬時に凍らせることができたようだ。そのまま両手で狼を砕く。

「十匹目だね」

戦闘終了。

グレゴリーは慌ててルルシスのもとに向かう。息はまだ乱れたままで、意識は失っていた。大けがをした部位は、止血の甲斐があったのか血こそは止まっていたが、ルルシスの青白い顔を見ると、あまり喜べる状態ではないことがわかる。

「応急処置はしたけどね。あまりに多くの血を失いすぎている。早く医者に見せた方がいい」

グレゴリーは左手が動かず、また、ジエツトも先ほどの魔術の後遺症でしばらく両腕を使うことができない。比較的軽症なハントが運

ぶことにしようか、などと話し合っていると遠くから少女の声がした。

「おーいつ、グ、グレゴリーさん？大丈夫、ですか」

「す、すげえ。本当にミネシスウルフを倒したのか」

「これで村は救われたの？」

たくさんの大人たちの先頭にリーコスが立ち、グレゴリーのもとにやってきた。

「リーコスさん！できるだけ早く医者を」

「お、お医者さんならもうつれてきました、よ。にっ人間の血の匂いがしたので……」

リーコスの隣に立っていた老人は救急箱を開けてルルシスの様子を見始めた。心配そうな顔をしつつも黙って処置を見届けるグレゴリーとジェットと違い、ハントは遠慮もなく医者に食ってかかった。

「おい、この医者信用できんだろうな。藪医者はごめんだぜ」

「藪医者でも素人よりましじゃろうて。どれ……」

確かに、医者の手際を見ると熟練の動きであった。仕事柄包帯を巻きなれている冒険者でもそう思うのなら、彼の技術はちゃんとしたものである。どうにも村全体が無能であるというわけでもないらしい。

「ふむ、血を流しすぎてるの。輸血の準備をしよう。用具はそろつとるからあとは提供者だけじゃ」

「なら僕からとつてください。彼女がこうなったのは僕の責任でもあります」

「俺のでもいいいぜ、なんならジェットのも合わせれば足りねえってことはないだろ」

「馬鹿かおぬしら」

グレゴリーとハントの提案を、医者は少しも悩まず却下した。グレゴリーは当然、彼の責任は文字通り彼の血肉をもって償うべきであると考えていたし、ハントたちも断られるとは思わなかった。しかし、医者は確固たる強い意志を声に乗せ、自身の職としてまっとうな判断を下した。

「おぬしらも血を流しすぎじゃ。特に若いの、おぬしもこれ以上血を

失ったら危ういぞ」

「だから何だというのですか。僕の部下を見捨てろと？僕は僕の部下のためならいかなる責任も負います。当然命が失われようとも」

グレゴリーにはグレゴリーなりの覚悟があった。その責任感が時として彼自身を猛烈に責めてしまうことをハントとジェットは知っていた。いつもはそんな彼を押しとでも支える彼らも、この時ばかりは何も言えず、ただ成り行きに身を任せていた。もちろん、グレゴリーから血を抜くことがあったら、彼が暴れてでも止めるだろうが。

はあ、と医者のため息をつきつつ、呆れたように呟いた。

「頑固じやの。そもそも、おぬしらが血を提供する必要なんてどこにもないじゃろうに」

「それはどういう」

言いかけたとき、リーコスが彼の発言を遮るように、おどおどと、それでいて覚悟を決めて発言した。

「わ、わたしの、を、つつ、使ってください！私は獣人ですけど。き、汚い獣の血が混ざっていますけど。それでも、」

リーコスは彼女なりに考えたことを一つ一つ、つつかえつつも話した。目に涙をため、声が震えようとも、グレゴリーたちのためになろうと考え行動した。グレゴリーはただ目を丸くして何が起こっているのか理解できずに座っていた。

すると、リーコスに感化されてか他の村人も次々と手を挙げた。

「いや、俺の血を使ってくれ。こんな幼い体から血を抜いてしまっっては、いつ死んでしまいかわからないだろう」

「私も協力するわ。だって村を救ってくれた恩人だもの」

その場にいた全員が自身の血を差し出した。ハントやジェットでさえもこの展開は予想外であった。もちろん、人によつてはただの手のひら返しであると思えよう。村を救ったからただ態度を変えただけであるように見えよう。しかし、それで十分だった。ルルシスの命が救えるのであれば、それ以上のことはなかった。

「ありがとうございます」

グレゴリーは頭を下げた。ただの謝罪ではない、この一つの動作に

感謝と過去の許しと未来の関係を一挙に作り上げた、そんな気がした。

こうして、グレゴリーたちの間で一人の犠牲もなくミネシスウルフとの戦闘を終えることができた。

ルルスは村長宅に運ばれて医者と助手たちにつきつきりで看病されることになった。グレゴリーたち三人は用事があるため、故グレア宅で養生することになった。グレアは生前魔剤師であったため、家にはポーションを作る機材が置いてある。グレゴリーは休みながらもさらなる回復ポーションを作る腹積もりであった。

ポーションを作りながらも、ハント、ジェット、少しの村人たちは今後ガウント村がどうなるのか、そも、なぜ彼らがミネシスウルフを退治することができたのかを話すことになった。

「てめえが秘密主義なのは今に始まった話じゃねえけどよ。そろそろ話してくれたらどうだ。なんで俺たちはミネシスウルフを倒せたんだ。それに『最悪の事態を免れた』ってのは何なんだ」

新米C級冒険者グレゴリー・グレゴリオをハントとジェットはよく知っていた。彼はC級としてはあまり強いということができない。メンタルも弱くすぐにへこんでしまう。しかし、彼がここまでやってこれたのは知識量と、それを現実生かす応用力である。彼は常に奇想天外な作戦によって難を逃れてきた。今回も、一体どんな手を使ったのか、それを彼らは聞きたかったのだ。

「僕は今回特別な手を使っていません。むしろ、僕は何もしなかったんですよ。何もできなかった。気づいたころにはすべて終わっていたのですから」

沈んだ顔をしたものの、グレゴリーはすぐに立て直す。とりあえず説明をしなければならぬ。

「二つずつ整理していきましょう。なぜB級相当のミネシスウルフを倒せたのか。それはあのミネシスウルフたちは本来の姿ではなかったからです。ジェットさん、通常のミネシスウルフの群れは大体何匹ぐらいかわかりますか」

「申し訳ないけど知らないね。本来戦う相手の情報は事前に調べてお

くけど……」

「俺はしねえぞ」

「君はね。今回はグレーウルフと戦うって聞いていたから」

「――百匹前後」

数の多さに皆が驚愕する。たった十匹でさえあれほど苦戦した相手が本来の十分の一。ミネシスウルフの強みは連携力である。仲間同士が意思疎通をして一匹の生き物であるように群れで狩りを行う。そんな生き物が約百匹ともなれば、なるほどそれはB級相当であろう。十匹を分断しつつも倒せたのに納得がいく。

「だが、残りは？」

「残りはおそらくフィストたちを追っていきました。ガウント村に現れたミネシスウルフが十匹だったときそう確信しました」

たしかに、本来百匹来るはずがその十分の一しか現れなかったら、最悪の事態を避けたといえるだろう。しかしなぜ、なぜ十匹程度しか現れなかったのだろうか。

「きつと僕たちが相手したのは足止めの部隊だったんです。メインは全員フィストの方へ。なぜそのような事態になったのかも予想できません」

「……肉塊」

ジエツトのつぶやきは正解だった。グレゴリーがわずかにうなずく。本来罠に使うはずだった肉がきれいになくなっていく。これはおそらく村の青年たちが旅路の途中に食べようと思ったのだろう。リーコスは肉塊のありかを、今朝嗅ぎ当てることができた。狼と同様の嗅覚を持つ彼女にできるなら、ミネシスウルフたちにとっても難しくないだろう。

「でも、なぜ？フィストがそんなミスをするとはとても思えない。出発の前に忠告の一つや二つをするはずでは？」

「忠告をしたでしょうね。でも、青年たちはそれを無視した。田舎町では肉はめったに食べられるものではありません。彼の言い分を無視して持ち運んでも何もおかしくはないでしょう。何せ自分たちのために村を見捨てるほど自己中心的なのですから」

結果、グレゴリーは何をすることもなく、ジェットとナント達が勝手に行動し、ともなつて判断をしたミネシスウルフにより末路が決定した。グレゴリーは何もできなかったのである。ゆえに、何の手柄もない。ただ、相手がミスをしただけ。

「ファイトのミスはナント達を連れて行ったことです。いざとなったときの肉壁にするつもりだったんでしようが。ただ、彼が愚図たちを仲間に引き入れたせいで、たつたそれだけで彼に悲劇が襲い、僕たちは助かったんです」

白き巨人と冒険者の資質

「グレゴリーは冒険者をやめるべき」

真っ白な髪はただまっすぐに腰まで伸ばし、身長は普通の男よりも頭一つ分でかい。顔は美人であつたが表情というものは一つもなかった。ただ無表情で凜、としている。冒険者として高身長というのは大きな武器である。

その女性が現れたのはミネシスウルフがガウント村を襲つてから二日後の朝。ルルシスの意識も戻り、十二分に回復ポーションを作り終えたグレゴリーもけがを治すことに専念していた。フィストを倒したミネシスウルフ本隊がガウント村に戻ってくる可能性もあつたが、正直九十匹を相手にできることなどほぼなかつたので皆割り切つていた。

「ミーミルさん、ミネシスウルフはどうになりましたか？」

「ん。ミネシスウルフは倒した。C級がひとりワイズに帰ってきて、一緒に引き連れてきたから」

「ちつ、あの野郎生きてやがつたか」

ハントが毒を吐くも女性は目を向けることもなくただグレゴリーを見ていた。手元には大槌^{おわづち}。その細身な体で扱うことができるのはなほだ疑問であつたが、彼女の獲物にはべつたりと血がついていて、おそらくはあの狼の血であつた。

「まあ、フィストがワイズまで逃げ帰つたおかげで私たちも救われたけどね。もし、ガウント村を出てすぐに絶滅していたら、本隊は間違ひなくこちらに来ていただろうから」

ワイズは発展した町であり、国の特色である冒険者もかなり強い部類である。ミネシスウルフは群れの総合でB級だが、グレゴリーたちが拠点としているワイズにはそこそこB級がいる。そして目の前の白髪の女性、ミーミル・ローワンもまたその一人である。

「C級おめでとう、グレゴリー。ひさしぶり」

「久しぶりですね、ミーミルさん」

ミーミル・ローワンは天才である。いや、表現としては天災と表記

した方が良い。彼女はたった一年半でB級にまで上り詰めた、四分の一巨人族の血が入った女性である。驚くべきはその腕力。何もかもを一切合切大槌をふるい叩きのめす。たったこれだけでB級になったといっても過言ではない。

「ミーミルさん、おそろしく戦闘があつたと思うのですが、けがとかはありませんか」

「ない。しいて言えばあの狼たちを五十四匹ぐらい倒して一気にここまで来たからちよつと疲れてる」

という割には彼女の顔にはやはり疲れというものは見えなかった。彼女はつかつかとグレゴリーに近づき、けがの確認をした後、はあとため息をつき「やっぱり」と続けた。

「やっぱり、グレゴリーは冒険者をやめるべき」

グレゴリーとしては痛感していることではある。ルルシスのけがについても、フィストに逃げられるまで事態に気づけなかった鈍感さも、あと一歩のところを取り返しのつかないところまで来ていた。これは自分の失態以外の何物でもない。

「ミーミルさんよお、確かに一年半やそこらでB級に上がったお方にはわからないかもしれないけれど、グレゴリーだって十分の活躍をしたと思うぜ。結果でいえば村も救えたし、チームからも死者を出すことがなかったんだから」

「ハントの言い分に賛成ですね。グレゴリーくんはリーダーとしての役割をしっかりと果たしてくれました」

ハントとジェットが否定する。隣にいるリーコスもこくこくと頭を振って意思を示す。もしこの場にルルシスがいたのなら彼女もまたグレゴリーをかばってくれていただろう。それでもなお、ミーミルの意見が変わることがなかった。

「本来のグレゴリーならけがの一つもしなかった。大方、味方のけがに動揺をして無茶をした。あんな雑魚相手に」

「グ、グレゴリーさんは、ル、ルルシスさんをつ、かばっていたんです！ ゆっくり戦ってたら、彼女を助けられませんでした！」

「それがなに」

冷たい声が冷たい表情から発せられた。どこまでも冷酷な言葉に時が止まった。彼女は何と言ったのだろうか？そう、仲間を見捨てるよう発言したのだ。それは、村を見捨てて逃げたナント達やフィストと同じようなことではないか。ハントはむきになって反論をしようとしたが、それをミーミルが遮った。

「フィストたちもある側面から見たら優秀。彼らの目的は『自分が生き残ること』。彼らは彼らなりに考えて、結局フィストはやりおさせた。それに比べてグレゴリーは？」

淡々とグレゴリーを追い詰める姿に、やはり反感を覚える三人ではあったが、言ってる内容はあまりに正しい。フィストの『手段を問わずに生き残る』というのは冒険者して一つの資質であることを、ハントとジェットはよくわかっていたからだ。グレゴリーはただミーミルのことをまつすぐに見つめ黙っていた。

「私はグレゴリーをよく知ってる。人生の目標が『より多くの人間を救うこと』だって。でも、自分の身に余る夢は、あなたの身を焦がすだけ」

もし、より多くの人間を救うのであればルルスなど見捨てて、完全に村を救うべきだった。一人の命で村の人間が救われるなら当然そうすべきである。

もし、仲間の命を優先するなら、村など捨てるべきだった。フィストを見習ってとつとガウント村から出ていくべきだった。

どちらも助ける、という自分の身の丈以上の目標を持っていたから、今回のように体を張り、けがを負った。冒険者としてぎりぎりまで戦うことは愚かであると誰もが知っていた。死線を乗り越えなかった冒険者はいない。が、死線を好む冒険者もまたいない。計画の不備によって死闘を演じることはあっても、死闘を前提に戦うことはあつてはならない。

ましてやリーダーなら。部下をけん引する上司としてはそんなことあつてはならない。お互いチームを引っ張るミーミルとグレゴリーだけが、当たり前前のように備えている責任感を前提とした会話。だからこそ、グレゴリーは一切の反論もなくただ沈黙を保つことしか

できなかった。

「あなたは冒険者をするには優しすぎる」

グレゴリーは冒険者をやめるべき。彼女が下した結論にもはや誰も反対の声をあげることができなかった。反論する能力をハントは持ち合わせていなかったし、リーコスにはまだ早すぎる。ジエツトもまた異を唱えるにはあまりに理性的すぎた。

リーコスは同時にこう思う。しかし、彼女は何者なのだろうか。グレゴリーに容赦なく言葉をぶつける彼女は、グレゴリーのことが嫌いなのだろうか。一つ一つミスを指摘して、彼の精神を追い込んでいくようにしか見えない。だから、次のミーミルの言葉は完全に予想外であった。

「だから早く、私のつがいになって」

「へ？」

リーコスは呆けたまま、おっさんたちは「またか」という顔をした。グレゴリーは初めてミーミルから視線をそらした。そのことを気にも留めずミーミルはグレゴリーの前に立つと、両手首を取り視線を合わせようとする。身長差や体勢により王子様と姫のように見えるが立場は逆である。

「私が養ってあげるから」

「僕が冒険者をやめたら、ミーミルさんから借りたお金返せなくなりますよ」

「夫婦は共有財産、でしょ」

「……他の人からも借りているので」

「私が返す」

会話の内容がひも男とその彼女そのものだった。まさか前半の長い批判がプロポーズの一環だったとはだれが思うのであろう。また、ミーミルの表情は変わらず、グレゴリーはしどろもどろをするばかりだ。

「あー、お二人さんの続きはワイズでもできるとして、この後どうすんだ」

「そうだった、私は護衛。今日のうちにみんなでガウント村を出る」

「えっ」

お昼には出るから準備して、という命令に皆が唯々諾々としたがう。ルルシスは自分の足で帰れるか心配であるが、人一人程度ならミーミルが背負えばいいということになった。

困惑したのはリーコスである。彼女とてグレゴリーたちがいつまでもガウント村にいるわけではないと十分理解していた。だが、彼女にとってあまりに急であることに変わりはない。外に出ていくミーミルを追いかけて「あ、あのっ」と話しかける。

「なに」

「えっと、その」

話したいことはいくつもあるはずだった。グレゴリーのことだったり、あるいは彼との関係だったり、ワイズについてのこと、頭の中をいくつもの話題が巡る。だからこそ、リーコスは何も話すことができなかった。ミーミルの冷たい目に圧迫感を覚えたせいかもしれない。ただ下を見て、こちらが話しかけたにもかかわらず黙ってしまった。ミーミルはため息をつく。

「はあ、あなたそんなに自分の血が嫌い？」

「……え」

関係のないはずだ。自分はただグレゴリーについて聞こうと思っていただけのはずである。しかし、腹の底にある、ずっと抱えてきた重荷に触れられたような気がした。自身のコンプレックスを一瞬にして見破られた。心の周りにある殻をいきなり突き破ってきたミーミルの言葉に息が詰まる。

『自分のような人間が彼に付きまとはいけない』って」

「っ!ど、どうしてっ」

リーコスは肩を大きく震わせた。初めて顔を合わせて、会話という会話もする前からミーミルはなぜ自分のことを知っているのだろうか。底知れぬ恐怖がリーコスを襲った。ミーミルは返答をしばらく待ち、来ないことを悟ると背中を見せてさっさと消えてしまった。「自信がないなら、いつまでも自分の殻にこもってればいい」と一言残して。

一人残された少女は、白髪の冒険者を追いかけるわけにもいかず、グレゴリーのもとに行くのも惨めで、このままあつたら彼に心配をかけるだろうと、村をふらつきながら回ることにした。

ミネシスウルフを警戒していたころはすっかり聞くことができなかつた笑い声がそこかしこから聞こえてくる。緑が生い茂る山のふもとからは子供たちが笑い叫ぶ声が、ボロボロになった家の中からは夫婦の笑い声が。酒屋はまだ朝なのにもかかわらず大人たちがひしめいていた。少女だけが孤独であつた。情けなくなつて、村のはずれに向かい顔を伏せて座つた。

「そこで何をしておるんじや」

声が聞こえたので顔をあげてみると、いつか見た医者であつた。

「な、なにも、してないです。お医者さんこそ、な、なんでここにいらんですか」

「わしの家は町はずれにあるんじやよ」

冒険者が急に帰ることになつたから、ルルシスの手当の最終確認に必要なもろともを取りに来たらしい。リーコスが返事をする元氣もなく、医者は彼女を心配した。

「待っておれ」

医者が家の中に入ると何かしらの装備品だろうか、少しほり被つた皮のポーチと中身の詰まつた袋を持ってきてリーコスに手渡した。

「これは……?」

「ポーチはわしが若いころ使つておつた装備品じや。袋には多少のお金が入つておる」

リーコスが慌てて中身を見ると、そこには一振りの短剣と冒険者になるのに必要な装備の一式が詰まつていた。多少年季が入つていくがよく手入れがされているからか使用することができそうだ。袋に入っているお金も、医者は少しと言っているが十分大金であり、ワイズでさえもひと月は遊んで暮らすことができるだろう。

「えっえっ? お医者さんは昔冒険者、だつたんですか?! それに何でこんなお金を、わ、わたしに——」

「贖罪とくざいじやよ。いや、自己満足と言つてもよい」

少女の当然の疑問に、医者はため息交じりに答える。その姿がほんの少しだけ、リーコスを支え続けたグレアや彼女を救ったグレゴリーに似ていた。

「息子を病から救えず、村はずれに家を構えなるべく権力とはかかわらないようにしておった。結果は村長や青年たちの暴走、そして長期にわたるおぬしへの差別じゃ。何と詫びればよいかわからぬ。だからせめて、今まで抑圧されていた分だけ、おぬしをしたいことをしてほしいのじゃよ」

「わ、わたしのしたいこと？」

声が上がっていることが彼女にはわかった。視界がやけににじみ、こらえようとしても涙がこぼれる。リーコスには自分が何をしたいのかわかっていた。それでもわからないふりをしたのは、その願いを他人の口からきき、肯定されたいから。

「おぬしはグレゴリーとともにいたいものじゃろう？」

その通りであった。彼女はただ彼のそばにいたいだけである。それでも彼がガウント村からいなくなってしまうなら、自身も出ていけばよい。彼が危険な場所に行くのなら、自身もまた武器をもって彼を守ればよいのだ。医者は手段を与えてくれた。

自身の手を強く握り、涙をぬぐったリーコスは感謝を述べ、駆け出した。

「ありがとう、お医者さんっ！奥さんにもよろしくね」

他意はない。ただ、夫婦は共有財産なのだから、お医者さんからもらったお金はその奥さんからもらったのと同じだと思ったのだ。

医者は笑い、リーコスがいなくなってからつぶやいた。

「とっくの昔に別れたよ。なあ、グレア」

老人の慈愛に満ちた瞳がリーコスの背を追った。

冒険者が強くなるには

酒屋。鼻につくアルコールのにおいと人々の喧騒にうんざりすることはよくあるが、たった一つだけ気にならなくなる方法がある。それは飲み会に参加してしまうことだ。

ワイズにある冒険者ギルドには酒屋として飲食スペースがついている。一部の賢い人間は職場と飲み席を一緒にするなど言ったが、その他大勢の馬鹿どもの反対により今の姿を保っている。基本的に冒険者はバカしかいない。

古ぼけた椅子に四人、同じテーブルを囲んでいる冒険者がいた。

ハゲの大男と水色の髪のおっさんたち。それと本作の主人公である黒髪黒目のグレゴリーについては説明する必要がないだろう。もう一人についても知らないわけではないだろうが、改めて紹介させていただきます。

くせつけの赤い髪、吊り上がった眼。赤いロープに身を包み、持ち手に赤い宝石の埋まった大きい杖を持った少女。『赤き超新星』と呼ばれる天才魔術師アマリス・ノーフェスである。

「しけたつらしているわねっ」

アマリスは元気な声で三人を激励するようにしゃべり、隣のグレゴリーに対しては背中をバンバンとたたいてさえた。実際に明るい顔をしているのは彼女だけであり、男三人は沈んだ顔をしている。グレゴリーに至っては頬に真っ赤な紅葉跡を残していた。

「僕をこの顔にしたのはアマリスさんですけどね」

カウント村から帰ったグレゴリーたちは冒険者ギルドに一通りの説明をした。では解散、となる前にアマリスはギルドにやってきて、グレゴリーの頬にキツイびんたを食らわせた後、男三人を引っ張って無理やり席に座らせたのである。

「それはあたしを心配させた罰よ、甘んじて受け取りなさい」

ふんっ、と鼻を鳴らし、どうにもご立腹の様子である。

本気で怒った女の子に対してグレゴリーはどうしたらよいのかわからなかった。ハントは論外として、奥さんがいるジェットでさえお

手上げのようだ。こういう場合はとりあえず下手に刺激をしない方がいいらしいということはわかった。

「つーか何で俺たちここに連れてこられたんだよ」

「私、妻と娘が待っているんですが」

「はあ？知らないわよそんなの。あんたたちが無事帰ってこれた祝宴として、せっかくあたしが誘ってあげたのに」

「一方的すぎるだろ」

とはいえ、依頼終わりに酒を飲みだすのは冒険者としてよくあることである。むしろ、そのために冒険者になったものも多い。ぶつくさと言いながらも結局全員この祝宴に参加することになった。

ここにいない冒険者、ルルシスはさすがにあのけがで飲むことはできない。病院に入って治療を受けている最中である。

ミーミルはまだギルド職員に捕まっている。というのも、ミネシスウルフを倒した後、何の相談もなくたった一人でガウント村に向かったらしく、独断で動いたこと、連絡をしなかったこともろもろで説教を受けている。本人の「愛ゆえに仕方なく」という言い訳も、説教が長引く理由の一つだろう。

「グレゴリー、あんたがやりなさい」

グレゴリーは最初何を言っているのかわからなかったが、アマリスがジョッキを手に高々と上げていたことからすぐに察する。

「えっ、ああ、はい。それでは皆様、乾杯」

「乾杯」

ひとまずのどを潤すも、アマリスの目的はバカ騒ぎをすることではないようで、早々に話題を切り出してきた。

「で、ガウント村で何があったか話してくれる？」

彼女の鋭い視線に、思わず目をそらす。誰も口を開かないことがわかると、隣にいるグレゴリーの襟をつかみ無理やりこちらを向かせる。アマリスの顔が目の前まで近づくが、彼が目を合わせることはなかった。

「あんたがしやべりなさいよ、あ・ん・た・が！」

圧力に耐えかねたグレゴリーはしぶしぶと事態の全容を語り始め

た。その内容をここに書くのはあまりに二度手間のため、あまり事態を把握していない読者諸君はぜひ過去の話を読んでみてほしい。

一気呵成、とまではいかないものの、途中途中飲み物を傾けながら、ギルドに話した内容とほぼ同じことをアマリスに伝えた。違う点は少しグレゴリーの感情が入っているぐらいか。

聞き終わったアマリスはふうつとため息をつくとき、頬杖をつきながら返答した。

「まあ、あんた割と語り手として信用できないから話半分で聞いたけど」

「じゃあ何で僕にしゃべらせたんですか」

「あんたにしか見えない景色があるからよ」

「幻覚かもしれないけど。そう言っていたはずらっぽく笑った。」

「それで、あんたが暗い顔をしているのはどうして？ ルルスに大けがを負わせたから？ フィストの裏切りに気づけなかったから？ それともミーミルに正論を言われたから？」

「全部です。だから僕にはしなれないことがあります」

即答であった。弱気になっている人間らしからぬ強い意志に、グレゴリーを残した三人の目が大きく開く。てっきりいつまでもうだうだと悩んでいると思っただからだ。

「僕は強くなります」

『自分の身に余る夢は、あなたの身を焦がすだけ』。ミーミルの言葉は正しい。少なくともグレゴリーはそう思っていた。自分が弱いから、救いたい人を救えない。弱いから、『より多くの人間を救う』という夢を叶えることができない。ならば、強くなればいい。強くなるしかない。

「強くなるつつたつてな」

ハントは頭を掻きながら、無い脳みそを使って考える。

「簡単になれるもんじゃないだろう。特にお前みたいなやつは。戦士とか魔術師とか役割が決まっていれば鍛え方も受け継がれているんだが」

グレゴリーの戦い方は異質である。腰に下げた鉈を使い接近戦を

試みることもできれば、魔術を使用して遠くからの攻撃、また防御をするすべを持つている。すべてに対応できると言えば聞こえはいいが、何もかも中途半端であると捉えることもできる。

「でも。逆に十分伸びしろがあるといえるよね。グレゴリーくんがどのように強くなりたいのかによって、訓練の方法は大きく変わるだろうけど」

「どのようによ……ですか」

「あたしが思うに、グレゴリーに足りないのは魔術の少なさね」

自信満々に胸を張り、グレゴリーの弱さを指摘したアマリスはそのまま声高々に続ける。

「魔術のレパートリーはそのまま切れる手札の数に変わるわ。できることが増えるのはそれだけで魅力的でしょ？」

さすがは五十以上の魔術を扱うことができるらしいアマリスの意見である。グレゴリーはが使える魔術はたったの二つしかなく、単純な魔術師として考えるなら信じられないほど少ない。

「魔術は師匠から教えてもらうのが理想的だけど、魔術書を使っても習得できるわ。結構値は張るけど、何とかして買いなさい」

「この前の竜の分がまだ手付かずですので」「そう。本当はあたしが教えてあげたいんだけど、属性が違う分勝手も大きく変わるから」

魔術は本来師匠から教えてもらえる。裏を返せば弟子意外に自身の魔術を教えることは基本的にない。魔術学校はそれゆえに学費が高いし、学科共通の授業では基本的なことしか教えてもらえない。本格的な魔術を習うのは研究室に配属、つまり教授に弟子入りをしてからなのだ。

魔術書はその点、読む機会さえあれば誰でも魔術を習得することができる。もちろん属性や適性があればだが。その分高価であり、また内容は難読であるものが多く、筆者と合う合わないのブレがかなり大きい。正直弟子入りした方が早い。

「魔術の数も大事だけど、質も大事にした方がいいね。特にグレゴリーくんは新しく魔術媒体を手に入れたばかりだろう？ 馴染ませる

ことが優先だと思うけど」

次に提案をしたのはジェットである。三人で竜殺しをする前に魔術媒体について語ったのを思い出した。彼は氷結石と呼ばれる魔石をペンダントにして身に着けており、魔術媒体を手に入れることが難しいと言っていた。

「誰だって素手よりも武器を手にした方が強い。でも、武器の特性も知らないまま扱うなら、場合によっては素手で戦った方がましだ」

分かりやすい例えもあつてか、グレゴリーには十分理解できた。ジェットに魔術を教えてもらえる娘は幸運であるといえよう。属性がもつと一般的であれば、彼は魔術学校で教授になることもできたのではないかとも思う。

「魔術について俺は何も出来ねえが、接近戦の心得ならある程度教えることができるぜ。多分、グレゴリーに必要なのは技術だろ」

次は四人の中で唯一接近戦がメインであるハントの意見である。「それっぽく鉞を振るえちやいるが、俺の目からみてもまだ改善の余地があるぜ」

一応、D、Cとランクに違いはあるものの、グレゴリーの技術はD級の専門よりか等しいか少し劣っている程度である。接近戦で戦えばハントに軍配が上がるだろう。魔術勝負では同様にアマリス、ジェットにも勝てない場合が多い。

どうにも、自分に足りないものはたくさんありそうだ。グレゴリーはふむとあごに手を当て考える。幸いなことに彼に協力し味方するものはおおい。本人もまたそれを自覚していた。もつとも、協力をしてくれるような仲間を守るために強さを得るのである。

グレゴリーは今後、より多くの人物に出会い、友好関係を築いていくだろう。経験は人を強くする。しかし、増えていく守りたい人から魔の手を追い払うには、さらなる強さが必要なのである。ならば、一体何のために強くなるのだろうか？

考え込むグレゴリーに、一つの影が忍び寄る。彼の背後にくつつくと、耳元でささやく。

「グレゴリーに必要なのは、腕力」

「うわっ、……ミーミルさんですか」

ピースサインをしながらも無表情なミーミルは、ギルド職員からの説教が終わったのか、強さ議論に参加してきた。

「腕力とグレゴリーは全ての問題を解決してきた。その二つが合わされば、最強」

「あー、申し訳ねえがミーミル。そいつは無理だ」
「なぜ？」

「グレゴリーの腕力に伸びしろがねえ」

「非力なものね」

「非力だからね」

「……」

尚も食らいついて腕力のすばらしさを伝えようとするミーミルであつたが、説教はまだ終わっていないかつたらしく、ギルドの職員が彼女を連れ戻しに来た。

「待ってて。すぐ終わらせてくるから」

「皆さん彼女を待たなくてもよいですよ。しばらく帰らせませんか」
ら」

ギルド職員はにこつと笑つて、ミーミルの首根っこをつかみ連れて行った。席についていたすべての冒険者が彼女に冷たい目線を送っていた。

こほん、と咳を一つ。水色のおっさんが場を仕切りなおした。

「さて、彼女の登場で場が少しコミカルになったけど、私が思うに、グレゴリーくんに必要なのは強さじゃなくて休憩だと思うんだ」

他二人もうなずく。冒険者は金使いが荒く、一度の依頼で多くのお金を稼ぐと、三日四日で使い果たするのが常である。しかし、さすがに毎回使うというわけではない。体を休める期間がどれだけ大事か、彼らは経験的に理解していた。

一方のグレゴリーである。彼は依頼をこなしたとしても翌日にはギルドに立ち寄っている。お金の使い方がとんでもなく荒い。ほとんどがガラクタに消え、さらには知人からも借りる始末。

たまに長期で休むことはあるが、たいてい興味本位であちこちに走

り回っているため体が休まることはない。

「そうですね。しばらく依頼を受けるのはやめます」

依頼を受けるのはやめる、とは言ったが休むとは明言しない。心の中ではどのように訓練をしようか、と算段を立てている。

「それがいいわ。あたしも昇級試験に専念しないといけないし」

「私もそろそろ娘に魔術を教えたいので」

「おいおい、となると通常運転は俺だけか。一緒に依頼を受ける仲間を探さなきゃな」

「僕はいつでも行けますよ」

「うるせえ休んでろ」

無駄話もそこそこに宴会はおしまいになった。グレゴリーが帰路に返ってる途中、獣人の少女を思い浮かべていた。ガウント村から一緒についてきた少女は、『私も冒険者になります』と言ってワイズに来てしまった。

もつとも、隣にいたミーミルの『最初から彼を頼るのはよくない』という意見を真に受けたのかしばらくは一人で行動するようだ。グレゴリーは心配でならなかったが、いざという時はみんなで助けることにしていた。ミーミルであっても、さすがに危機が迫ったら助けに入るだろう。

「明日からどうしようかな」

家に帰り、寝室の床に落ちているガラクタをどけながらベットに入る。

強くならなければ。まだまだ守るべき対象は増えるだろう。なるべく多くの人たちを救わなくては。

繰り返し繰り返し、頭に浮かんでいく。せっかく久しぶりの自宅なのに、グレゴリーは十分に寝ることができなかった。

後輩目隠し盾使いの見舞い

ガウント村の一件で多くの人間が傷ついた。精神的にも肉体的にも。その中で、一番大けがをした者はだれか、というところはルルス以外にはないだろう。前髪を目元まで伸ばし、大楯を使うE級冒険者。わき腹と足をミネシスウルフにかみつかれ、命まで危ぶまれたのだ。

ワイズにあるリウイング病院は正しい処置、まあまあ値段、早すぎる退院を掲げており、ルルスはいったん医者のかかかっておくことになっていた。

木製の扉をたたく。「つス」と、入室の許可らしいものをもらえたのでグレゴリーは病室に入る。中にはベットひとつ、隣にダンスやいすなどがある。窓から光が差し込んでおり、照らされる彼女の顔色は十分によいようだ。

「つス！」

「ああ、おはようございます。ルルスさん」

昨日、ガウント村から帰りギルドおよびアマリスへ出来事を説明した。朝になり真っ先にするにはルルスへのお見舞いである。早すぎるのも悪いと思っていたが、起きた時刻は朝と昼の間だったので、支度も含めるとほとんど昼の時刻であった。

「二応、お土産を持ってきたので」

「つス？」

普通であれば果実や花束などを持っていけばよいのだろうが、グレゴリーが持ってきたのは回復ポーションである。あまりにかわいらしくないお土産ではあったが、ルルスはそれでも嬉しそうに受け取った。

空いている席に腰を掛け、一つ二つ声をかけた後、会話が続くことなく二人とも黙ってしまった。ルルスの心情はわからないが、グレゴリーは彼女の傷、および死にかけたことの責任から負い目を感じている。そのことを感じ取ったのか、ルルスは小さい声で話しかける。

「先輩のせいじゃないっすよ」

思わず顔をあげると、いつもは前髪に隠れている彼女の瞳がこちらを見ていた。心を読まれたことか、後輩に気を使われたことかグレゴリーの顔が少し赤くなる。と、同時に申し訳ない思いが浮上する。

「先輩がいなかったらミネシスウルフも倒せなかったっす。私たちが生き残ったのも先輩のおかげっす」

「と、言うなら、ルルシスさんのけがもやっぱり僕のせいです。僕がもう少し強かったら」

問題なのは、彼が彼自身を許すことができないことだろう。そもそも、強さの話をするならけがをしたルルシス本人が弱かったのが悪いのである。冒険者のほとんどは自己責任であるし、フィストに盾にされた腰ぎんちやくたちも、一部の間では「あんな奴を信用していたのが悪い」と言われる始末である。

それだけにグレゴリーの責任感がいかに強いかがわかる。当然C級だからというのもあるのだが、大部分は彼のトラウマ、それと生まれながらの性質である。

「先輩は十分に強いつす」

「いったいどこがですか」

「優しいところっす」

ルルシスは目を閉じて、過去を懐かしむように、柔らかい声で語った。

「私は物心ついたところから孤児院にいたっす。親の顔も覚えていないから、シスターだけが私たち子どもよりどころっす」

孤児院には大きく分けて二つの種類がある。一つは宗教団体が立ち上げたもので、もう一つは貴族に作られたもの。ルルシスの話に出てきたシスターという言葉から、おそらく前者である。ユウ王国の国教、つまり「国全体でこれを信仰しよう」というのはイフロンと呼ばれる宗教のみである。

イフロンの最大の特徴は何といってもかなり寛容であるところだ。そも、冒険者が集まるユウ王国は、様々な人種、伝統、思想であふれかえる。そうすれば当たり前のようにいさかいが起きる。その摩擦

を減らすために大体のことは許してくれる——悪く言えば毒にも薬にもならない——宗教、イフロンが国教となるのだ。

そのほとんどないような教えの中に、一つこのようなものがある。『子は宝である。我が子を守りなさい。それでも余裕のあるもの、また子を持たぬものは、他の子を守りなさい』。この一文だけでいうならなんと素晴らしいことだろうか。

「シスターは優しくして強い人っス。でも、お祈りをささげているとき、たまにすごく寂しい目をするっス」

シスターはたまに自分の無力さを嘆くことがある。どれだけの子供たちを救っても、手の届かない場所はあり、救えない人たちがいる。そのことを思い出すたび、彼女は悲しむのだろう。

「先輩の今の目が、その目にそっくりっス」

ルルシスから見てシスターは強く優しく、そして儂い存在だった。その印象はそのままグレゴリーにも適用されている。だから、ルルシスは彼の役に立ちたいのだ。なぜなら、強くて儂い人を守るために、自分よりも他人を守ろうとする優しい人を守るために、ルルシスは大楯を手にとったのだから。

彼女の手がそっと、握りしめているグレゴリーの手を包んだ。人の温かさが伝わってくる。振りほどこうとも思えなかった。

いつまでそうしていただろうか、グレゴリーは先ほどまで悩みこんだ顔をしていたのに、いつのまにやら迷いを断ち切っていた。しかし、それはルルシスの発言を否定する決断である。

「僕はシスターさんが強い人だと思いません」

自分の大切な人を否定されたからか、ルルシスは大きく目を見開いて固まってしまった。何も、彼がシスターのことを馬鹿にしたからではない。シスターを否定することは、グレゴリー自身も否定することだから、それがショックだったのだ。

尚もグレゴリーは続ける。顔に自嘲じちようするような薄ら笑いを浮かべて。

「いえ、シスターさんは十分に強い人です。ただ、戦場に立たない限り、です。刻一刻と戦況が変わっていき、命が失われていく環境では、

その儂いやさしき逆効果ですよ」

それではあまりに優しすぎる。

ああ、グレゴリーは今になった思い出した。ミーミルのセリフを。
『あなたは冒険者をするには優しすぎる』

グレゴリーはルルススが半生を語ったように、とつとつと過去を振り返りはじめた。

「僕はルルスさんと同じように孤児でした。けど、一人の女性が拾ってくれたんです」

ルルススの手にぎゅつと力が籠められる。身の上を話すグレゴリーはとても苦しそうで、実際彼はなるべく昔のことを思い出したい。ない。

「自分が姉になると言っただけでしばらく面倒を見てもらいました。途中、エンゲージ制度を使ってA級冒険者に保護者になってもらいましたが、それらの制度もすべて姉がやってくれました」

エンゲージ制度とは、C級以上の冒険者がランクの低い子供たちの保護者となり、冒険者としての技術を教える仕組みである。基本的に活用されないのは、保護者側にメリットが全くないからである。そんなことするなら自分の子供に受け継がせた方が早い。

しかしどういふ訳か、グレゴリーの姉はA級と話をつけ、この制度を見事に活用して見せたのである。ただ、当時のグレゴリーにとって不思議だったのは、わざわざ従事しなくても彼らは生活できていたという点だ。

「目的は僕の安全のためだったんです。自分をA級冒険者に預けると、途端に『世界を救うための旅』と言って飛び出してしまいました」
破天荒な女性だった。わがままで、傍若無人ぼうじゃくぶじんで、本当に強かった。グレゴリーにとって強さとはまさに彼女のことであるのだ。

「……その女性はとうなつたんつか」
「世界を救いましたよ」

グレゴリーはぐちゃりと笑った。なんとも痛々しく、決して子供にはできない笑顔であった。

「僕の考える強い人は、少なくともあなたに怪我を負わせるような人

ではありません。これは僕の判断ミスです」

そもそも、ミネシスウルフは群れ単位でB級、一匹一匹でさえもD級である。E級のルルシスに相手をさせるのはあまりに酷である。それでもルルシスを前線に出すしかなかったのはどうしようもないほどの人手不足と、ミネシスウルフを分断させるのに手一杯だったグレゴリーの責任である。万が一の場合を考えて、ルルシスは後方に下げべき――

「――それは、いやっス」

グレゴリーが下そうとした決断に、ルルシスが確固たる意志をもって否と唱える。その続きは決して言わせまいと、本来の彼女ではありえないほど強い声で遮った。

「それじゃあ、ただ守られるだけっス。私はまだ弱いけど、みんなに頼られたいから冒険者になったっス。先輩もそうっスよね？先輩だっってお姉さんに頼られたかったはずっス」

彼女の視線から逃れるように、グレゴリーは目をつむり自身の心に集中した。にもかかわず、彼女の言い分が凶星だったのか、的外れだったのか、自身にすら判断がつかなかった。ただ手を軽く額に置き、しばらく考え込んでいた。だが、わからないものはわからない。きつとこの言葉は時間をかけて解決させるものだと見切りをつけて、少々強引だが会話を本来のものに戻すことにした。そう、グレゴリーはルルシスの見舞いに来たのである。

「けがの調子はどうですか」

「わき腹は先輩の回復ポーションのおかげでそこまで長引かなそうっス。足の方は……後遺症は残らないってお医者さんが」

包帯の巻かれた足を自分でポンポンとたたくと顔をしかめて痛そうにする。リウイング病院はさっさと退院させるので、しばらく自宅治療が続くそうだ。

となると、心配なのは治療期間中のお金周りである。病院代などは組んだチーム内から平等に使用されるが、通院中までのことは保証することができない。回復ポーションは定期的にグレゴリーが届けるとしても、たくわえが無ければ食うにも困る。体が資本の冒険者だか

らこそ、けがをした時が怖い。

「先輩と違って貯金するタイプなんで大丈夫っスよ」

んべっ、といたずら小僧のように舌を出し、すぐニコツと笑った。

ルルシスの元気な姿が見られたからか、一つ大きな息を吐くとグレゴリーは長い間病室にとどまっていたことに気が付いた。

慌てて立ち上がり、着ている服のしわを伸ばすと、ルルシスの方を向く。

「ちよつと話過ぎましたね、まさかここまで会話が弾むとは思っていませんでした」

「っスー！」

すっかりいつもの調子に戻った彼女を見て、「それでは」と去っていくグレゴリーの背中に、ルルシスは一つ心配そうに声をかけた。

「最近、イフロン教に過激派が出てきてるっス。なんでも入団していない一般人を襲うらしいっス」

先ほども述べたが、イフロン教は毒にも薬にもならないことで国に認めてもらっているのである。そんな、悪目立ちをするのはかえって悪影響だろうに、と考えながらも忠告を頭に入れて、ついにグレゴリーはルルシスの病室から出て行った。

リウイング病院を出てから歩いて十分以内に、魔術商店と呼ばれる大きめの店がある。グレゴリーはアマリスのアドバイスを従うように風の魔術書を購入しようとしていた。

しかし、店へ向かっている途中、路地裏の方に真っ黒なロープに身を包んだ人物が、露天売をしていたのが目に入った。いかにも、といった店ではあったが、もとより好奇心が強く、さらにはガラクタ好きということも相まって、自身でも気が付かないうちに足が向かっていた。

「あつ、いらっしやいませですわ」

「……ですわ?」

「そうですね。人の語尾に何か文句がおありですか?」

「いえ」

ロープに身を包んだ人物は体格が見えないこともあって、てつきり

小汚いおっさんだと思っていたが、女性の声で、まだ若く、しかもどこかで聞いたことがあった。しかし、似ているだけだろう。なぜなら彼女がこのような路地裏にいるわけがないのだから。

改めて商品に目を通すと、どれもきれいな状態で保存されている魔術関係の商品であった。中には魔術書も二冊あり、値段もほぼ定価である。正直、露天で売っている品ぞろえではなかった。

「しかもこの『風属性の魔術と媒体』、アマリスさんがお勧めしていたリストにも乗っている」

アマリスは貴族の生まれで、最近絶縁されてしまったものの貴族としての教育を受けてきた。その際得た信用できる魔術書の一覧リストを、グレゴリーにも見せてくれたのだ。

「これっていただけますか」

「もちろん！はあー、初めて売れましたわ」

当たり前である。こんな怪しげな店で大金を使う方がバカである。

「あつ、でも一応もう片方の魔術書も見ただ方がいいですわ。平民の方々にとっては魔術書一冊でも高価なのでしょう？ゆっくりお決めになられて構いませんわ」

余計なお世話である。この店員、絶望的なまでに接客業が向いていない。

「こっちはどんな魔術書なんですか」

「これは『加重詠唱の書』ですわ。加重詠唱を習得いたしますと、魔術を一つ継続しながら新しい魔術を詠唱・発動することができますの。使える魔術が多い方にお勧めですわ」

「二つしか使えないんですけど」

「宝の持ち腐れですわー！」

本当に言いたいことをいう性格のようだ。きつと実家で甘やかされて育ったに違いない。

とはいえ、目的のものは手に入ったし、魔術書を買ったうえでさらに買い物をする財力も胆力もグレゴリーは持ち合わせていなかった。家で帰ることになった。

願わくば、今回買った魔術書は、ガラクタたちの仲間入りしないよ

う
に。

生存と狼娘とエンゲージ制度

冒険者ギルドの裏側。更地には少しだけ草が生えているだけで他には何もなかった。この土地は一応、冒険者たちの訓練場となっている。そして、二人の男性が、模擬戦を行っている最中であった。

大剣を持った大男、ハントに対して、黒髪黒目の青年、グレゴリーは鉈をもって向きあっていた。

「ッ」

地面をけたグレゴリーは、相手のリーチをつぶすように懐に潜り込み、鉈を細かく振るう。ハントは器用に大剣を使い、最小限の動きで攻撃をいなしていた。

右腕に鉈をもって、水平方向に右から左へ切りつける。ハントはバックステップでかわすも、鉈は罠である。ハントが鉈に注意しているを見たグレゴリーは、鉈をふるった格好のまま後ろ蹴りを腹部にくらわした。

「いつてえ」

衝撃に逆らわず後ろに飛んだハントも、さすがに無傷とはいかなかったのだろう。苦痛を顔に表した。しかしすぐにニヤツと笑うと、声をかけてきた。

「いい蹴りだ。けど、悪手だな」

大剣の構えを下段にし、蹴りによって空いた距離を使って、ハントは勢いよく突っ込んでくる。

ハントの突進を受け止めようと、鉈を手前に構え防御の姿勢を取りはしたものの、体格差もあって吹っ飛ばされてしまった。

受け身を取りながらも地面に転がると、起き上がる暇もないうちに、グレゴリーののど元に大剣の切っ先が突き付けられた。

「参りました」

グレゴリーの降参と共に、今日のハントとの模擬戦は終わった。十戦やって二勝八敗。魔術なしではあったもののC級として振るわないう結果となった。

「体重差のある相手に待ちの姿勢はよくねえな。前半のように速さで

圧倒していた方がやりずらかったぜ」

伸ばされた手を握ってグレゴリーが立ち上がる。反省会はギルド内でやろう、と話していると、観戦をしていたアマリスが近寄ってきた。

「情けないわね、C級がD級に負けるなんて」

言葉こそ辛辣であるが、あくまで友達をからかうも声のトーンである。グレゴリーも彼女に合わせて、

「アマリスさんこそ試験対策大丈夫なのですか。特訓に付き合っただけでなく、観戦までしてくれるなんて」

「あんな簡単な試験受からないバカいる?……あら、ハントさんいたの? 気づかなかったわ」

「じゃあさつきまで何を観戦してたんだ?」

ワイズに帰ってきてから約二週間。アマリスとハントはよく彼の特訓に付き合ってくれている。アマリスの魔術の腕はともかく、ハントの技術はC級でも見劣りしないほどであり、頭の方がもつとしっかりしていたら彼もC級に至れたかもしれないほどだった。

三人が並んでギルドに向かいながらも、話をつづけた。

「ハント、グレゴリーの技術はどんなものなの? 正直魔術の進みはまあまああって感じなのよね。成長はしているのだけど、爆発的かって言う……」

「はん、二週間そこらで大幅に成長するかよ。そんなのせいぜい素人どもぐらいだぜ。強くなればなるほど成長スピードは落ちていくんだよ。凡人はな」

むしろ、C級になって、二週間で成長を確認できてる時点でかなり異質だぜ。と、続ける。

グレゴリーの中途半端な立場がそうさせたのか、彼自身の才能の結果かわからないが、ともかく二つの側面からグレゴリーは成長していた。本人もそのことを自覚しながらも、さて、いったいどれほど時間をかければ、満足なほどの力を手に入れられるか。

考えながらもギルドに入ると、そこには見覚えのある、汚い金髪が目映った。真っ先に反応したのはハントである。

「フィストてめえっ!」

不潔な金髪、他人を馬鹿にするように張り付けられたにやけっつらは、彼のどこまでいっても軽薄な性格を表していた。

フィストはC級冒険者である。ガウント村では真っ先にグレゴリーたちを裏切り、彼の取り巻きとナント達村の青年を引き連れ、唯一生き残った男である。役職は盗賊、斥候といった方が良いかもしれない。

大男であるハントに詰め寄られても、彼はへらへらとした態度を改めることなく、両手を広げて歓迎の構えすら見せた。

「ああ!ずいぶんと久しぶりだなア。ガウント村ではどうもお。けど俺を恨むのは筋違いってモンだぜ。冒険者は全て自己責任、だろオ?」

「どの口が言いやがる!」

「落ち着いてください、ハントさん」

尚もとびかかるハントをグレゴリーは諫め、自身にも言い聞かせるように説明をした。

「ガウント村の一件は全て決着がつかしました。そも、依頼内容を偽っていたこともあり、フィストさんの対処は多少の罰金で済んでいます。今彼に暴力をふるってはこちらに非ができてしまいます」

「はん、非が何だってんだ。こいつを殴れるなら多少の罰則ぐらい目をつむってやるぜ」

とはのたまりつつも、ハントは冷静さを取り戻した。フィスト相手に、愚を犯す危険性。彼に社会的優位性を与えてしまえば何をされるかわからない。

C級冒険者『生存』サヴァイヴフィスト。彼は暴力以外を得意とするもっとも冒険者らしくない冒険者で、その性格および内容は誰よりも冒険者に向いていた。

「卑劣な男ね」

「ああ!そうだとも!!卑怯で卑劣で悪漢なのが俺アさまだ。けどよお、生きるって卑怯って意味だろ?」

「あんたにとってはそのうなんじゃない?」

アマリスとの言葉の応酬も、いやな笑顔で返すフィスト。仕掛けた側の彼女の方がすでに嫌気がさしていた。

「フィストさん、今回はどのようなご用事ですか」

「よおグレゴリー。俺アもうし分けなと思つてたんだ。前回の一件でよお、いや、仕方がなかったとはいえ結果としてガウント村とお前らを見捨てることになってよオ」
「えっと」

質問はうまく返つてこない。そのことを指摘しようかと思つたが、続きがありそうなので黙つた。

「だからそうだなあ、少しでも、ガウント村に貢献しようとおオ、彼女の支援を買つて出たわけだ」

「彼女？」

「ああそうだ。こつちに来い」

感動のご再開。耳障りな声とともに出てきた少女にグレゴリーたちは思わず目を張つた。

うつむきながら出てきた獣人の少女、グレゴリーを追いかけてガウント村から飛び出した彼女の名前はリーコスである。

「グ、グレゴリーさん」

「そういうことですか」

誰もが驚く中、グレゴリー一人だけが状況を正しく把握していた。

遠親殺しとおしんころしと呼ばれる詐欺が一時期冒険者内ではやったことがある。

内容はこうだ。新米冒険者に「冒険者の心得を教える」と嘘をつき近づき、その新人に多額の借金をさせる。のちに、借金を返させるために奴隷商に新人を売ってしまう。結果として貸した分より多くのお金とその冒険者に入る、という仕組みだ。

もちろん、赤の他人が個人を奴隷にすることはできない。そこで悪用されるのがエンゲージ制度、つまり冒険者を弟子にする制度だ。一度保護者になり身元を保証することによって、新人を売ったお金をもらうことができる。

あまりに遠い親族（他人）を売り殺すことから、遠親殺しと呼ばれる詐欺は、たしかに、リーコスを対象にするのに最適であった。

「ならここに来たのはエンゲージ制度を結ぶためということですか」
「そうだなア、残念、たった今提出したところだぜエ」

ぎやははと笑うフィストに、グレゴリー冷や水をは浴びせるように鋭くはなつた。

「たった今提出された、ということはまだ承認されてませんね。なら僕は、リーコスさんにエンゲージ制度を申し込みます」

「はア？何言ってるんだ。すでに提出してんだろオ。なら、今更名乗り出ても無駄だろうがよお」

「そうですね、僕の記憶だ正しければ『エンゲージ制度において二名以上が保護者に名乗り上げた場合、被保護者の意見が優先される』と記されているはずです」

「！わ、わたしグレゴリーさんがいいですっ」

グレゴリーの意図をくみ取り、リーコスが慌ててぶんぶんと首を振った。

フィストは一瞬苦虫を食い潰したような表情をしたが、すぐにいつものにやけつつらに戻し、冷静に反応した。

「けどよお、こっちはすでに提出をしてんだぜえ。なら、あくまで俺たちの立場は互角、だよなア」

「互角なら、なんですか」

両者がにらみ合い、空間が凍り付く。ギルド内にはもはや彼ら以外に会話をしているものはいなかった。

「決闘だっ」

その声は当事者ではなく周りにいた冒険者が勝手に叫んだものだった。しかし、同時に野次馬を含むすべての冒険者たちの代弁であった。

「場所は どうします？」

「訓練場でもいいだろうなア。時間は？」

「二週間後で」

「それでいいぜえ」

二人は敵対しているとは思えないように息を合わせる。

「立ち合いは冒険者ギルドの訓練場」

「時刻はア今日より二週間後」

「リーコスのエンゲージ制度をめぐって」

「正しい権利を主張するウ」

「我、『害虫』の名をもって」

「我、『生存』の名をもって」

「ここに決闘を宣誓する」

うおーだとか、ぎゃーだとかやかましい野次馬をしり目に、アマリスがつぶやく、

「あいつら何で決闘の口上を覚えているのよ」

「誰にだってそういう時期はある」

ハントのフォローも効果を表さないようで、彼女の視線は炎の魔術師とは思えないほど冷ややかだった。

気が付くとフィストはすでに消えており、リーコスのみが残っていた。冒険者にとっては決闘で決められたことは絶対であり、今更身柄を拘束しても意味などないのだ。

狼の少女は涙を浮かべながらグレゴリーに駆け寄り、ひしとしがみついた。

「グ、グレゴリーさん。申しわけ、ない、ですつ。あなたの迷惑にならなようにって、一生懸命頑張ったのに、け、結局、私は……」

命の恩人の助けになりたい。その願いを胸に今まで生きてきた村を捨てワイドまでやってきたのに、また彼の足手まといになる。そのことが彼女にとってどうしようもなく悔しかった。

「僕こそ申し訳ありません。あなたのような純粋な子供が、この町に来てどのような目に合うかなんてわかりきっていたのに」

こちらの手違いだ、というグレゴリーの言葉になおさら悔しくなる。彼にとって私はいつまでも守られる側なのだ。自分は彼の助けになりたいのに。

「ま、今はおんぶにだっこだろうけどよ、グレゴリーのそばにいればそのうち助けになるようなこともあるんじゃないやねーの。これからは師弟なんだからよ」

「ハントのいう通りだけど、まだ気が早いわ。フィストってやつ腕

前はどのようなよ」

「C級の中ではそこまですけど、僕よりは圧倒的に強いですね」「じゃあだめじゃない!」

だめである。そも、グレゴリーはC級としてまだまだ新米で、それはC級の中で一番弱いと言つてさしちがえないだろう。

むろん、それは今のままでは、である。

「当てがあんのか?」

「あります。そのためにも、僕は合わなくちやいけない人物がいるのですが」

この町にいることは知っている。しかし、どこにいるかはわからない。い。

「なるほどね、じゃあまず、私たちはその人を見つけるところから……」

「その必要はありませんわ」

凜、として、その人物は現れた。うす緑の肌に、とがった耳、高貴な生まれを感じさせるお嬢様言葉。

「お、お前は」

驚くハント。

「誰?」

「誰ですか?」

知らないアマリスとリーコス。

「わたくしをご存知ない?ではよくお聞きになられて。わたくしの名前はセレビア・L・リーファイアですわ」

一国のお嬢様がそこに立っていた。

「どうも、ひさしぶりですね」

「ええ、おひさしぶり」

お互いにニコツと笑つてあいさつを交わす。二人の関係がわからない方は、ぜひ一、二話目を読み返していただきたい。

「お嬢様にはぜひ、二週間のうちに教えていただきたい魔術があります」

「それを聞く理由がどこにありました?わたくしはただでさえあなた

に杖を送ったのに、さらなる要求をするのは失礼ではないかしら」

グレゴリーは彼女の護衛任務を終えた後、個人的に魔術媒体『リクヨの杖』をもらっている。貸し借りでいえばすでに多大な恩を受けているのである。セレビアも本気で言っているわけではないが、何の理屈もなくただ自信に甘えるだけであるなら、何もせずに去る腹積もりである。しかし――

「だからこそですよ、セレビアお嬢様」

「？」

「魔術媒体は本来、師匠が弟子に与えるもの。でしたら、かわいい弟子のわがままぐらい、聞いていただくのが師匠というものではありませんか」

「ふっ、ふふふ、あっはっはっはっはっ」

あまりに失礼な物言いに、本人たちを除いた冒険者たちが冷汗をかく。不敬なんて話ではない。厚顔無恥にもほどがある。

だが、言われた本人は何とも思っていないようで、少し笑った後、グレゴリーの目をまっすぐ見て、

「ふふ、いいですね。気に入りましたの。あなたのようなまっすぐな向上心、嫌いじゃなくてよ。それでわたくしの子弟さま、何をお望みですか」

「ええ、それはですね――」

師弟制度をかけて、群像

「どんな感じなんだい」

冒険者ギルドの裏側、訓練場と呼ばれる更地にはすでに常連となった冒険者たちが集まっていた。

今、声を出したのは水色の髪のおじさん魔術師ジェット・アイスマン。それに答えるのは、ハゲ、ハントである。

「決闘まで残り一週間。まあ、ぼちぼちと言ったところだな。ところでジェット、お前娘に魔術を付きっ切りで教えるんじゃないのか」

「それがね、『たまには一人で練習させて!!』って。家を追い出されちゃった」

「まだ十才だろ？ずいぶん早い反抗期だな」

「『トイレまでついでこようとしない』って。こんなに反抗期が早いなんてね」

「てめーが犯行期だけじゃねえか」

子煩悩の塊の凶行にやれやれと頭を振って、視線をグレゴリーに戻す。訓練場では汗をかきながら杖を振る彼と、教鞭をふるうセレビアの姿があった。

「ぼちぼちとは言ったが、この一週間は意力がちげえな。先週末までは何つうか、心ここにあらず、って感じだったが」

「彼の真骨頂はまさに『課題解決能力』だからね」

「どういうことだ」

訳知り顔のジェットにハントが続きを促す。ジェットは時々こうして後方保護者面をよくする。あくまで彼自身の鋭い観察眼があつてのものだが、正直ハントはちよつと気持ち悪いと思っている。

「今までの訓練は『強くなる』という漠然とした目標のせいだよ。彼はそういう抽象的な目標には向いていないんだ」

それが今、『フィストに決闘で勝つ』という目標が定まった。具体的な内容であればあるほど、グレゴリーの強みは増す。

「さすがの観察眼だな、フィスト」

「まあね、正直グレゴリーくんのことちよつと息子だと思ってる」

「ちよつとかわいそうだな」

「アマリスさんは娘」

「かわいそうだな」

「冗談はともかく、フィストにとつても彼の成長性は危険視せざるを得ないだろうね。だからそろそろ妨害の一つや二つ出てくるかなと思っただんだ」

「ああ、それで」

と、二人は足元を見る。そこには氷漬けにされ、剣で体を破壊された十数人のチンピラたちの姿だった。

「うう」

彼らのうめき声を無視して、話が続く。

「じゃあこいつらフィストにやとわれたのか。なんかグレゴリーにちよつかい出してたと思ったら」

「暗殺者、というにはあまりにお粗末だね。大方偵察って感じじゃない？ どうせ、グレゴリーの戦闘情報でも知ろうとしたんだろうさ」

「はかせてみるか？」

「無理だろうね。フィストはそこらへんしっかりしてるし」

物騒なことを会話をしながら、それ以上は興味を失ったみたいで、「はん、くだらねえな。ところでところでグレゴリーの訓練についてだが——」

襲撃なんてのは些細なささいなことだと言わんばかりに、彼らは以後世間話に話を咲かせる。

場面は変わる。どこかの地下室だろうか、昼間にかかわらず部屋中暗く、また窓もない。先ほどの訓練場とは打って変わって陰気臭い場所だが、二人の男性が話していることは一緒である。

片方の名をフィストといった。

「それでよオ、暗殺は失敗、だっけかあ？」

「……それが」

フードをかぶったもう片方の男が、恐ろし気に答える。彼は町のチ

ンピラ団『不承不承』のリーダーであり、フィストに雇われた身であった。

彼の表情からフィストは作戦の失敗を悟る。

「偵察も、だア？お前ら一体何ならできんだよ」

怒気を含む罵声に男は黙ったままであった。

さすがのフィストも、あんな有象無象でグレゴリーを暗殺できると思っていない。必要なのは情報である。戦闘さえ行えば、それがわかるというのに。

「そ、それが、ハントとジエツトとかいうやつらが」

「邪魔が入るぐらい予想できんだろオ。だからあ、一人の時を狙うとか、寝込みを襲うとか考えられんだろオ？愚図がよ」

思ったよりも使えない。フィストは隠しもせずのため息をつく。それになけなしのプライドを傷つけられたのかフード男の顔に赤みがかかる。

何を偉そうに、くそつ、こんな奴、お前のいう通りいつか寝首を掻いてやる。

「お言葉ですが、対象者の訓練を見ても、奇怪としか言えません。あの気味の悪い耳長女と、どの属性でもない魔術の練習など……」

「だからそれを知るためのお前らなんだろオウが。下らね工言い訳はそこまですておくんだな」

にべもなく言い放つとフィストは腰を上げ立ち去ろうとする。口も開けない男に向かつて、どうでもいいように聞いた。

「あアそうだ。俺ア、お前に言ったよな、お前以外の奴には俺が依頼主だってことを隠しとけて。あれ、守られてンのか」

「え、ええ」

そういえば、依頼内容にそんなのが含まれていたような気がする。と、そこで一つの名案が、男に天命のように与えられた。

依頼主を秘匿にするということは、ばれたら困るということだ。もし、俺がこいつをゆすればこの鼻持ちならない男はどうするだろうか。

散々俺を馬鹿にしたんだ、それにチームを壊滅状態ではないか。少

しくらい、いい目を見てもいいはずである、そう思い口を開いた、はずだった。

「あ」

気が付くと、男ののど元には短剣が突き刺さっていた。思わず悲鳴をあげようとするも、それを可能とする器官がすでにつぶれている。

「じゃア、お前を殺せば秘密は守られるってことだ、ん？」

質問を投げかけておきながら、フィストは振り返ることなく部屋を出ていった。かつて人間だったものが部屋を真っ赤に染めるのみ。

一階に上がると、あらかじめ用意しておいたわらに火をつけ、表に出る。ここはフィストの隠れ家であったが、一つや二つ消えたところで支障はない。彼の言う「寝込みを襲う」というのは彼自身もまた当然のように対策してあるのだ。

「さてとお」

先ほど人を殺したと思えないほどのんきな声を出しながら、フィストは思想に耽る。

グレゴリーとの決闘にさほど不安はない。同じC級だが、その实力には大きな隔りがある。戦闘を得意としないフィストではあったが、それは相手も同じことだろう。

問題は自分自身の社会的立場である。

(一応すべての行動はグレーだがあ、少しヘイトを稼ぎすぎているなア。手ごまも犬畜生に食われちゃったし)

冒険者は個人の自由が確保されているのと同時に、個人では生きにくい制度ではある。舌先三寸が得意なフィストだが、聞く耳すら持つてもらえなければ彼の本領も発揮できない。

第一、ミネシスウルフの件がかなり響いている。もし、グレゴリーたちも痛手を受けていたなら、フィストの逃走も仕方のないことだと評価されていたかもしれない。しかし、相手はガウント村の英雄。一方こちらは大損害を作り出した。

さらに悪いことにグレゴリー一派には少し恨みを買いきっていた。だがしかし、

「そこらへんは、グレゴリーを殺してからでいいかア」

決闘中不慮の事故で相手を殺してしまっても責任は問われない。彼の一派も、頭が倒されれば反撃する意欲もなくすだろう。その後、ゆっくり立場を回復させていけばいい。これが彼の計画だった。

「なんだか、彼忙しそうね」

再び場面は変わって、冒険者ギルドに併設された酒場。昼食としては遅く、夕飯としては早い時間帯に、真つ赤な魔術師、アマリス・ノーフェスが座っていた。飲み物だけを頼み、紙面を広げて昇級試験の対策をしていた。

相對するは獸人の少女、リーコスである。い心地が悪そうに、ただでさえ小さい体を狭めて座っていた。

彼女二人は面識があまりなく、どちらも会話上手ではないものの、アマリスは少女のメンタル管理として話し相手になっていた。

「大体、どうしてあんな胡散臭いフィストについていったのよ。あんなの町を崩壊一步手前までもって行って張本人じゃない」

あまり責めるような言葉にならないよう気を付けながら、半分好奇心の質問は半分心からの疑問であった。言い訳、ではないものの、リーコスからせめてもの手口を聞き出したところだった。

リーコスは怯えるように、小さな声を出した。

「彼に足りないのは狡猾さだって」

「ん？」

「彼は優しすぎるから、狡猾な誰かが必要なんだって。わ、わたし彼の助けになりたかったんです。それで、焦ってて、そしたらフィストさんが」

奴に必要なのはやさしさではない。彼にはあふれんばかりのやさしさがすでになるのだから、彼に足りない物こそお前は身に着けるべきだ。そして、俺はその技術を持っている。

このような口調で誘われたらしい。そこから彼の指示に従ってあれよあれよという間に借金地獄である。

もつとも、これだけでだまされたわけではない。他にも細やかなだます手順、手口が用意されていたのだろうが、結局のところ一番の理

由はそれだった。

「わたし、納得しちやっただんです。彼は優しすぎるんだって、まじめすぎるからあんなに傷つくんだなって。だから」

この際、フィスト自身のうさん臭さはむしろプラスに働いたのだろう。逆に、そのような裏技じみた、真正面から向き合わない技術が、リーコス欲するところだったのだ。

アマリスは少し考えて、小さくうなつた後、結論を出した。

「確かに、あのごみの言い分は一理あるわ。全部が全部嘘じゃないところが厄介ね。でも一つだけ間違いなく言えることがあるわ。あなたはその技術に向いていない」

そもそも、命の恩人に報いたいという目標から、身に着ける手段が姑息さであるのがひどい矛盾だった。もつとも、まだ子供である彼女にそんなことを言うのは無茶というものであるが。

「まったく、これはグレゴリーの間違いよ。幼い子供をこの町にほっておくのが一番の悪手だわ」

「で、でもーわたしは守られてばかりじゃいやなんですつ。だから子ども扱いなのは」

「じゃあ力を身につけなさいよ。……って、そうやって彼に騙されたわけね」

早く、早くと結果を求めるものは、どれだけ怪しい近道でも試さずにはいられない。なるほど、フィストには詐欺の才能があるようだ。そして、リーコスにはだまされる素質と背景があったわけである。

はあ、とため息をつき頬杖をつくアマリスは憂いの表情であり、その大人っぽさにリーコスはドキリとした。私に足りない物、大人らしさ。自身には足りない物であふれているらしいと悟り、リーコスもまた心の中のため息をついた。

「だいたい」

言いかけて一拍おく。これは自身にも当てはまることでもあるから、自分に言い聞かせるためにも、アマリスはあえて語気を強める。「会ってたかが数週間の相手に、性格がどうか判断する権利はないわ。私もグレゴリーは善人だと思うけど、だからと言って狡猾でない

とは限らない」

目的のためならいかなる手段を使うことこそが狡猾であるなら、グレゴリーもまたそうではない保証はない。それが良いことなのか悪いことなのかはわからないが。

ともかく、彼に救われた二人だからこそ、彼を神聖化している部分はあるだろう。神聖化は言い過ぎでも、色眼鏡ぐらいいはついている。そのことを自覚しなければ、彼の助けになりたい彼女たちも間違った判断を下しかねない。あるいは、間違っている彼を正すことができないかもしれない。

「けど、ま、前も言ったけど時間はあるわ。これからゆっくり彼の人となりを見ればいいし、あなたもゆっくり力をつければいい。もちろん彼が決闘に勝てばの話だけど」

「それは、大丈夫だと思います」

と、二人は顔を合わせて笑いあった。先ほど、彼への先入観をなくそうと決めたばかりで、それでも彼が勝つことを疑わない。ひどい矛盾を自覚しながら、彼女たちはその色眼鏡を外すことはなかった。「いいわね、あんたの笑顔。そうやって笑ってなさい。彼もあなたに笑っていてほしいでしょうから」

「はいっ、アマリス、さん」

「アマリス姉さんでもいいわよ。今日、泊まる場所ある？よかったらあたしの宿屋に来なさいよ。今までどこに泊まっていたの」

「えっと、ジエツトさんの家に」

「あたしの宿屋に来なさい。いいわね？」

もちろんジエツトは妻子持ちだし、ここ最近家は追い出されているからアマリスの考えていることにはなっていないのだが、彼女まで娘判定されてはたまらない。一人でも被害者を減らすべく、かつて不慣れであった命令まで行うのであった。

もともと、ジエツトのがばがば娘判定はすでに行われ、全くの手遅れではあるが。

各々が各々、決闘に向け準備をしている中、時間は刻一刻と約束の時に近づいていく。鍛えるものも、策略を巡らすものもいる中で、運

命の女神は誰に微笑むのかはわからない。

「ふう、これで何とか」

「まあ、形にはなりましたわ。まさか、あなたがこんなに不器用だったなんて」

「でも、間に合ったからいいじゃないですか」

「赤点すれすれですわ」

「十分ですよ」